ISSN 0039-9094

台湾青年

一九六一年11月22日　第三種郵便物許可　一九八五年10月5日（毎月1回5日発行）

王育徳博士追悼号

TAIWAN CHENGLIAN

台湾独立聯盟発行

一九八五年　十月号

300

月　刊

台湾青年

台湾独立聯盟日本本部

MONTHLY THE TAIWAN CHENGLIAN

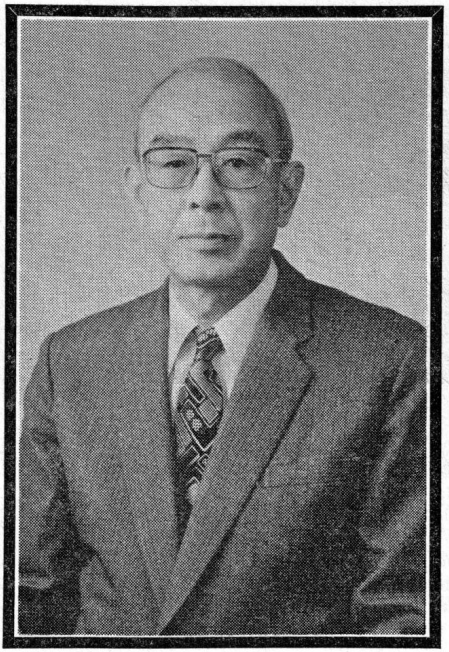
Published by JAPAN HEADQUARTERS,
WORLD UNITED FORMOSANS FOR INDEPENDENCE

No. 300　　1985. 10. 5

目　次

報　道　王育徳博士逝去す……1
資　料　王育徳博士年譜……6
　　王育徳博士著作目録……8
弔　辞　弔辞……黄　有　仁…13
　　弔辞……秋本英男…15
　　弔辞……有馬元治…16
　　弔辞……遠山景久…18
　　弔辞……許　世　楷…21
王先生の思い出　亡き夫を偲んで……王　雪　梅…24
　　燃えて尽きた父……王　明　理…26
　　王育徳文学博士との御縁……向山寛夫…28
　　王育徳精神と王育徳思想……黄　文　雄…29
　　台湾のためなら、なんでもなさった王先生……林　耀　南…31
　　「台湾青年」との出会い……金　美　齢…33
　　信念を貫いた生涯……孫　明　海…35
　　台湾語こそ民族の魂……林　啓　旭…37
　　自分にも同志にもきびしかった王先生……侯　栄　邦…39
　　家を売ってまで自費出版……蔡　五　郎…41
　　偉大な民族の魂の建設者……林　登　志…43
　　不可欠だった先生の研究……青木達雄…43
　　王先生は、本当に愛情の深い、
　　やさしい方だった……宋　重　陽…44
遺　稿　「一寸の虫にも五分の魂」の戦い……王　育　徳…47
論　文　〔東京高裁〕台湾人元日本兵の補償請求
　　国は救済を急げ……宋　重　陽…50
ご会葬御礼……23　　公　告…表4

王育徳博士逝去す



九月九日午後六時四二分、台湾独立聯盟総本部中央委員兼『台湾青年』発行人王育徳博士（写真）が逝去された。享年六一歳、これからというときに、痛恨の極みである。

本年四月、奉職先である明治大学の診療室で心臓病があることがわかり、東京女子医科大学病院に入院したのは五月一五日のことであった。精密検査の結果、狭心症であることがわかり、手術して根治を計ることも検討されたが、片付けねばならない用事が山積していたので、夏休み中に再考慮することになり、さしあたっては二、三カ月ほど入院して治療することになった。入院後二週間して、このぶんなら自宅療養でもよいとのことで退院した。もちろん「無理をしてはならない」との条件つきであったが、仕事熱心な博士のこと、じっと篭っているのは性分にあわず、救急用のニトログリセリンを常時カバンに忍ばせての仕事の連続であった。

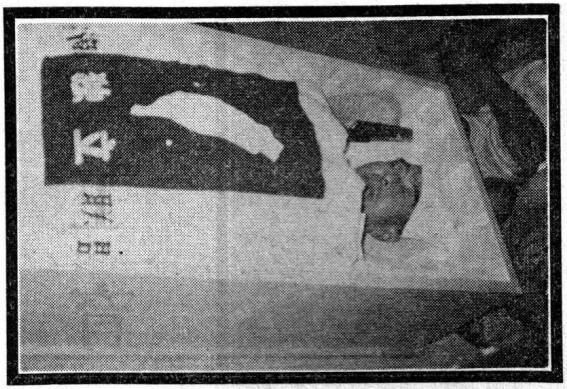
およそ月一回の定期検査を受けていたが、異常は認められなかった。

九月八日（日曜日）、遠来の珍客が訪問、午後五時ごろにお客が帰えり、博士はまたもや二階の狭い書斉に上がって、結果的には遺稿になる原稿（本誌掲載「『一寸の虫にも五分の魂』の戦い」）の執筆をつづけられた。

午後七時一五分ごろに夕食、例によって、そそくさと飯をかき込み、夕食を終えたのは七時三〇分、突然に気分が悪いといいだし、雪梅夫人に薬を要求、夫人にいわれるまま横になられた。そのとた

んに、「ニトロを頼む」といわれ、夫人が急いでニトログリセリンを口に入れてあげたが、もはやそれを嚙む力もなく二、三分苦しみ、それから高いイビキをあげて、人事不省に陥った。

夫人が急いで、昵懇にしておられた近所の青柳医院に電話をかけたが、医師は不在だったため、青柳夫人がかけつけてくれた。救急車は電話してから五分ほどで到着したが、このとき心臓はすでに三分間ほど止まっており、救急隊員の懸命のマッサージで息をふきかえした。容態がやや鎮静するのを待って、東京女子医大付属病院に担ぎ込まれたのが午後八時三〇分ごろ、ここ二四時間が勝負だというのが医師団の診断であった。



「王先生倒れる」の報に親族、同志が急いで馳けつけた。

翌九日午前九時から徐々に意識をとりもどし、ご家族に「いま何時？」と質問された。夫人が、「二時よ。翌日の午後二時ですよ」と答えると、「よく寝たな」といわれた。しばらくして令嬢に向って「もう長くないな」といわれ、結果的にこれが博士のご家族への最後のおことばとなったが、このときはみんな、「これで助かる」と思った。

ところが午後四時四七分に容態が急変し、医師団の懸命な救急措置にもかかわらず、午後六時四二分、ご家族、親戚、同志に見とられて永眠された。心筋梗塞であった。

深夜の一〇時すぎに無言の帰宅。

訃報は同志を通じて世界各地の同胞に伝わり、翌朝、日本の各大新聞はこぞって博士の逝去を報じた。

一〇日午前一〇時、ご自宅で納棺、ヨーロッパ出張中の許世楷日本本部委員長に代わり、黄有仁前委員長がご遺体に台湾独立聯盟の盟旗をかけ（写真）、博士の長年にわたる偉大な貢献を讃えた。

同日午後七時から、東京都池袋にある菩提寺、「祥雲寺」でお通夜が営まれ、生前のご友人など二八〇名が参列した。

一一日（火曜）午後二時、同じく祥雲寺で告別式がおこなわれ、黄有仁総本部副主席が、米国にいる張燦鑽総本部主席に代わって、葬儀委員長をつとめた。

孫明海総本部中央委員が司会をつとめるなかを読経が進み、参列者の胸をしめつけた。故人の遺徳を偲ぶすすり泣きの声が、あちこちから洩れる。聯盟総本部など各本部、世界台湾同郷会を初めとして各国の台湾同郷会、台湾人公共事務会、台湾人権協会、台湾自救運動など、世界の台湾人の社団から供えられた生花に埋まった博士の遺影は、依然として厳めしかった。

黄有仁葬儀委員長、台湾人元日本兵士補償請求弁護団長秋本英男弁護士、ご友人で台北高等学校のご同窓の有馬元治衆議員が弔辞を読んだ。お通夜に参列したときに遠山景久ラジオ日本社長が供えた弔辞を宋重陽中央委員が代読した。

一八の大学の学長、学部長、教授から寄せられた電報、数多くの国会議員、世界各地からの電報の一部が披露され、今さらながらに博士のご交遊の広さが偲ばれた。

あいにくの雨にもかかわらず、五百名ほどの参列者の焼香がつづき、葬儀は予定より二〇分近くオーバーした。

午後三時二五分、棺が開けられ、近親者と同志たちが最後のお別れをした。

遺容は実に安らかであった。滂沱として流れる涙を拭おうともせず、人びとは思い思いのままに博士に言葉をかけながら、ご遺体に花を埋めた。博士のご遺体にかけられた台湾独立聯盟旗もみるみる間に花に埋まる。蓋が閉じられ、釘が打たれるとき、日本本部の盟歌が流れた。午後五時、ご遺体は、新宿の落合火葬場で荼毘に付された。

謹しんでご冥福を祈ります。

博士の遺徳をしのんで、在米台湾人はニューヨーク、ワシントンDC、ロサンゼルスの三個所で、ヨーロッパの台湾人はオランダで開催される全欧台湾同郷会年次大会でそれぞれ、同じく九月二一日に「王育徳博士追悼会」を開いた。また「台湾公論報」はその台湾基金から「王育徳賞」を設けることを決定した。

尚、ご遺族のご住所は下記のとおりである。

〒171 東京都豊島区千早町二—三五
王　雪　梅
電　話（03）九五七—六九九五

戒　名：「大慈院普賢育徳居士」
菩提寺：東京都豊島区池袋三—一五七一　祥雲寺
電話（03）九八四—二四〇八
地下鉄有楽町線要町駅五番ゲート徒歩三分

讀賣新聞

☆14版☆　昭和60年（1985年）9月10日（火曜日）

王育德氏（おう・いくとく＝明治大学商学部教授、「台湾人元日本兵士の補償問題を考える会」事務局長）九日午後六時四十二分、心筋コウソクのため、東京都新宿区の東京女子医大病院で死去。六十一歳。告別式は十一日午後一時から豊島区池袋三の一五七一の祥雲寺で。自宅は豊島区千早町二の三五。喪主は妻梅（せつばい）さん。

台湾・台南市生まれ。昭和二十四年、台湾独立運動に絡み、身の危険を感じて日本に脱出。東大大学院卒。大学で中国語を教えるかたわら、台湾独立連盟総本部中央委員をつとめ、台湾独立派の月刊誌「台湾青年」を主宰していた。「台湾・苦闘するその歴史」「台湾海峡」などの著書がある。

朝日新聞

社会　14版　1985年（昭和60年）9月10日　火曜日

王育德氏（おう・いくとく＝明治大学商学部教授）九日午後六時四十二分、心筋こうそくのため、東京・新宿の東京女子医大付属病院で死去、六十一歳。葬儀・告別式は十一日午後一時から豊島区池袋三ノ一五七一の祥雲寺で。喪主は妻雪梅（せつばい）さん。自宅は豊島区千早町二ノ三五。

月刊誌「台湾青年」の発行人を長くつとめ、「台湾人元日本兵士の補償問題を考える会」事務局長だった。著書に「台湾語入門」など。

毎日新聞

14版　社会　1985年（昭和60年）9月10日（火曜日）

王育德氏（おう・いくとく＝明大商学部教授、台湾語専攻）九日午後六時四十二分、心筋こうそくのため東京新宿区の東京女子医大病院で死去、六十一歳。葬儀・告別式は十一日午後一時から豊島区池袋三の一五七一の祥雲寺で。自宅は同区千早町二の三五。喪主は妻雪梅（せつばい）さん。

日本で台湾独立運動に携わるとともに、「台湾人元日本兵士の補償問題を考える会」事務局長として尽力。著書に「台湾・苦闘するその歴史」「台湾海峡」などがあり、雑誌「台湾青年」発行人。

サンケイ新聞

<19>　15版　昭和60年9月10日

王育德氏（おう・いくとく＝明治大学商学部教授、「台湾人元日本兵士の補償問題を考える会」事務局長）九日午後六時四十二分、心筋コウソクのため東京都新宿区の東京女子医大病院で死去、六十一歳。台湾・台南市出身。自宅は東京都豊島区千早町二ノ三五。告別式は十一日午後一時から豊島区池袋三ノ一五七一、祥雲寺で。喪主は妻、雪梅（せつばい）さん。

東京新聞

〔15〕昭和60年（1985年）9月10日（火曜日）

王育德氏（おう・いくとく＝明治大学商学部教授、「台湾人元日本兵士の補償問題を考える会」事務局長）九日午後六時四十二分、心筋コウソクのため東京新宿区の東京女子医大病院で死去、六十一歳。台湾出身。自宅は豊島区千早町二ノ三五。告別式は十一日午後一時から同区池袋三ノ一五七一、祥雲寺で。喪主は妻雪梅（せつばい）さん。

（王育德博士の逝去を伝える新聞）

発行所
高知新聞社
高知市本町3丁目2—15

3月10日（火曜日）

王育徳氏（おう・いくと）＝明治大商学部教授、「台湾人元日本兵士の補償問題を考える会」事務局長、九日午後六時四十二分、心筋コウソクのため東京都新宿区の東京女子医大病院で死去、六十一歳。台湾・台南市出身、自宅は東京都豊島区千早町二ノ三五。葬儀は十一日午後三時から豊島区池袋三ノ一五七一、祥雲寺で。喪主は妻雅梅（せつばい）さん。

昭和二十四年来日。東大、

発行所
神戸新聞社
神戸市中央区雲井通7-1-1
郵便番号 651
電話 (078) 221-4121
振替口座 神戸 30

©神戸新聞社 1985年

王育徳氏（おう・いくと）＝明治大商学部教授、「台湾人元日本兵士の補償問題を考える会」事務局長、九日午後六時四十二分、心筋コウソクのため東京都新宿区の東京女子医大病院で死去、六十一歳。台湾・台南市出身、自宅は東京都豊島区千早町二ノ三五。葬儀は十一日午後三時から豊島区池袋三ノ一五七一、祥雲寺で。喪主は妻雅梅（せつばい）さん。昭和二十四年来日。東大、

発行所
西日本新聞社
福岡市中央区天神一丁目4番1号（郵便番号810）
郵便振替口座福岡20番

©西日本新聞社1985年

王育徳氏（おう・いくと）＝明治大商学部教授、「台湾人元日本兵士の補償問題を考える会」事務局長、九日午後六時四十二分、心筋コウソクのため東京都新宿区の東京女子医大病院で死去、六十一歳。台湾・台南市出身、自宅は東京都豊島区千早町二ノ三五。告別式は十一日午後二時

発行所
横浜市中区太田町2-23 郵便番号231
神奈川新聞社
電話(045)201-0831

©神奈川新聞社 1985

王育徳氏（おう・いくと）＝明治大商学部教授、「台湾人元日本兵士の補償問題を考える会」事務局長、九日午後六時四十二分、心筋コウソクのため東京都新宿区の東京女子医大病院で死去、六十一歳。台湾・台南市出身、自宅は東京都豊島区千早町二ノ三五。葬儀は十一日午後三時から豊島区池袋三ノ一五七一、祥雲寺で。喪主は妻雅梅（せつばい）さん。昭和二十四年来日。東大、

王育徳氏（おう・いくと）

（王育徳博士の逝去を伝える新聞）

王育徳博士年譜

一九二四年　一月　三〇日に、台湾台南市本町二―六五にて出生
三〇年　四月　台南市末広公学校入学
三四年一二月　生母毛月見女史逝去
三六年　四月　台南州立台南第一中学校入学
四〇年　四月　四年修了で台北高等学校文科甲類入学
四二年　九月　同校卒業、東京へ
四三年一〇月　東京帝国大学文学部支那哲文学科入学
四四年　五月　疎開のため帰台
一一月　嘉義市役所庶務課勤務
四五年　八月　終戦
一〇月　台湾省立台南第一中学（旧州立台南二中）教員。演劇運動を起こす。処女作「新生之朝」、延平戯院で上演される
四七年　一月　林雪梅女史と結婚
四八年　九月　長女曙芬出生
四九年　八月　香港を経て日本に亡命
五〇年　四月　東京大学文学部中国文学語学科再入学
一二月　妻子渡日
五三年　四月　東京大学大学院中国語学科専攻課程進学
六月　尊父、汝禎翁逝去
五四年　四月　次女明理出生
五五年　三月　東京大学文学修士。博士課程進学
五七年一二月　『台湾語常用語彙』自費出版
五八年　四月　明治大学商学部講師
六〇年　二月　台湾青年社創設、初代委員長（六三年五月まで）
三月　東京大学大学院博士課程修了
四月　『台湾青年』発行人（六四年四月まで）
六七年　四月　明治大学商学部専任講師
埼玉大学外国人講師兼任（八四年三月まで）
六八年　四月　東京大学外国人講師兼任（前期のみ）
六九年　三月　東京大学文学博士授与
四月　明治大学商学部助教授に昇任
東京外国語大学外国人講師兼任（⇩）
七〇年　一月　台湾独立聯盟総本部中央委員（⇩）
『台湾青年』発行人（⇩）
七一年　五月　NHK福建語アナウンサー審査委員
七三年　二月　在日台湾同郷会副会長（八四年二月まで）
四月　東京教育大学外国人講師兼任（七七年三月まで）
七四年　四月　明治大学商学部教授に昇任（⇩）

七五年　二月　「台湾人元日本兵士の補償問題を考える会」事務局長（⇩）

七七年　六月　アメリカ留学（九月まで）

一〇月　台湾独立聯盟日本本部資金部長（七九年一二月まで）

七九年　一月　次女明理、近藤泰児氏と結婚

一〇月　外女孫、近藤綾出生

八〇年　一月　台湾独立聯盟日本本部国際部長（⇩）

八一年一二月　外孫、近藤浩人出生

八二年　一月　長女曙芬病死

台湾人公共事務会（ＦＡＰＡ）委員（⇩）

八四年　一月　「王育徳博士還暦祝賀会」、東京の国際文化会館で開かれる

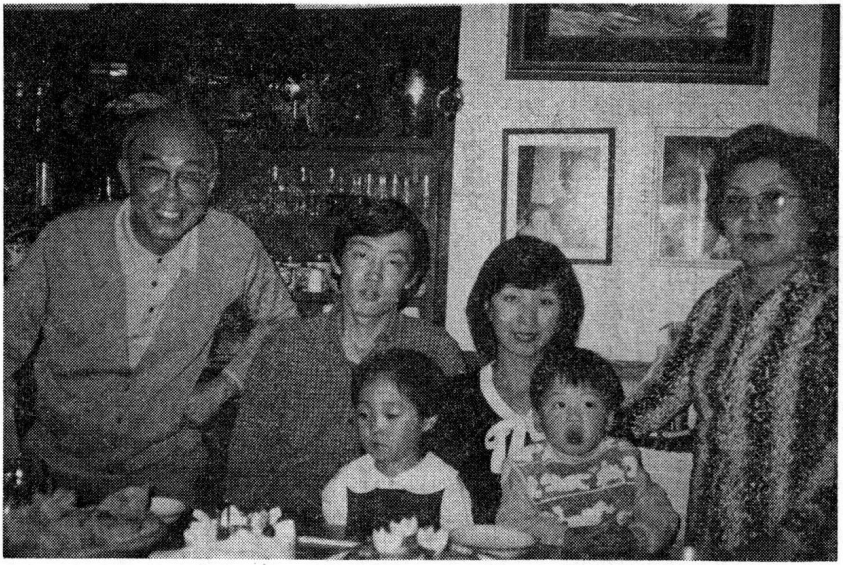
四月　東京都立大学講師兼任（⇩）

八五年　四月　最初の狭心症発作

七月　台湾独立聯盟功労者として日本本部委員長の表奨を受ける

八月　最後の劇作「僑領」、世界台湾同郷会聯合会年次大会で上演、自ら監督、演出にあたる

九月　八日午後七時三〇分、狭心症発作、九日午後六時四二分心筋梗塞で逝去。



娘さん夫婦とお孫さんを囲んで。左端が王博士、右端は同夫人

王育徳博士著作目録（初稿）

一　著書

1　『台湾語常用語彙』東京・永和語学社、一九五七年。
2　『台湾――苦悶するその歴史』東京・弘文堂、一九六四年。
3　『台湾語入門』東京・風林書房、一九七二年。東京・日中出版、一九八二年。
4　『台湾――苦悶的歴史』東京・台湾青年社、一九七九年。
5　『台湾海峡』東京・日中出版、一九八三年。
6　『台湾語初級』東京・日中出版、一九八三年。

二　編集

1　『台湾人元日本兵士の訴え』補償要求訴訟資料第一集、東京・台湾人元日本兵士の補償問題を考える会、一九七八年。
2　『台湾人戦死傷、五人の証言』補償要求訴訟資料第二集、同右考える会、一九八〇年。
3　『非常の判決を乗り越えて』補償請求訴訟資料第三集、同右考える会、一九八二年。
4　『補償法の早期制定を訴える』同右考える会、一九八二年。
5　『国会における論議』補償要求運動資料第四集、同右考える会、一九八三年。
6　『控訴審における闘い』補償請求訴訟資料第五集、同右考える会、一九八五年。
7　『二審判決〝国は救済策を急げ〟』補償請求訴訟資料速報、同右考える会、一九八五年。

三　共訳書

1　『現代中国文学全集』15　人民文学篇、東京・河出書房、一九五六年。

四　学術論文

1　「台湾語表現形態試論」（東京大学文学部卒業論文）、一九五二年。
2　「ラテン化新文字による台湾語初級教本草案」（東京大学文学修士論文）、一九五四年。
3　「台湾語の研究」、『台湾民声』一号、一九五四年二月。
4　「台湾語の声調」、『中国語学』四一号、中国語学研究会、一九五五年八月。
5　「福建語の教会ローマ字について」、『中国語学』六〇号、一九五七年三月。

6 「文学革命の台湾に及ぼせる影響」、『日本中国学会報』一一集日本中国学会、一九五九年一〇月。
7 「中国五大方言の分裂年代の言語年代学的試探」、『言語研究』三八号、日本言語学会、一九六〇年九月。
8 「福建語放送のむずかしさ」、『中国語学』一一一号、一九六一年七月。
9 「台湾語講座」、『台湾青年』一～三八号連載、台湾青年社、一九六〇年四月～一九六四年一月。
10 「匪寇列伝」、『台湾青年』一～四号連載、一九六〇年四月～一一月。
11 「拓殖列伝」、『台湾青年』五、七～九号連載、一九六〇年一二月、六一年四～八月。
12 「能吏列伝」、『台湾青年』一二、一八、二〇、二三号連載、一九六一年一一月、六二年五、七、一〇月。
13 "A Formosan View of the Formosan Independence Movement," *The China Quarterly*. July-September, 1963.
14 「胡適」、『中国語と中国文化』光生館、一九六五年、所収。
15 「中国の方言」、『中国文化叢書』言語、大修館、一九六七年所収。(但し未刊らしい)
16 「十五音について」、『国際東方学者会議紀要』一三集、東方学会、一九六八年。
17 「閩音系研究」(東京大学文学博士学位論文)、一九六九年(未刊行)
18 「福建語における『著』の語法について」、『中国語学』一九二号、一九六九年七月。
19 「三字集講釈(上)」、『台湾』台湾独立聯盟、一九六九年一一月。「三字集講釈(中・下)」、『台湾青年』一一五、一一九号連載、台湾独立聯盟、一九七〇年六月、一〇月。
20 「泉州方言の音韻体系」、『明大人文科学研究所紀要』八・九合併号、明治大学人文研究所、一九七〇年。
21 「客家語の言語年代学的考察」、『現代言語学』東京・三省堂、一九七二年所収。
22 「中国語の『指し表わし表出する』形式」、『中国の言語と文化』、天理大学、一九七二年所収。
23 「福建語研修について」、『ア・ア通信』一七号、一九七二年一二月。
24 「台湾語表記上の問題点」、『台湾同郷新聞』二四号、在日台湾同郷会、一九七三年二月一日付け。
25 「戦後台湾文学略説」、『明治大学教養論集』通巻一二六号、人文科学、一九七九年。
26 「郷土文学作家と政治」、『明治大学教養論集』通巻一五二号、人文科学、一九八二年。
27 「台湾語の記述的研究はどこまで進んだか」、『明治大学教養論集』通巻一八四号、人文科学、一九八五年。

五　事典項目執筆

1 平凡社『世界名著事典』一九七〇年、「十韻彙編」「切韻考」など、約一〇項目
2 『世界なぞなぞ事典』大修館書店、一九八四年、「台湾」のことわざを執筆。

六　学会発表

1 「日本における福建語研究の現状」一九五五年五月、第一回国際東方学者会議。
2 「福建語の教会ローマ字について」一九五六年一〇月二五日、中国語学研究会第七回大会。
3 「文学革命の台湾に及ぼせる影響」一九五八年一〇月、日本中国学会第一〇回大会。
4 「福建語の語源探究」一九六〇年六月五日、東京支那学会年次大会。
5 「その後の胡適」一九六四年八月、東京支那学会八月例会。
6 「福建語成立の背景」一九六六年六月五日、東京支那学会年次大会。

七　劇作

1 「新生之朝」、原作・演出、一九四五年一〇月二五日、台湾台南市・延平戯院。
2 「偸走兵」、同右。
3 「青年之路」、原作・演出、一九四六年一〇月、延平戯院。
4 「幻影」、原作・演出、一九四六年一二月、延平戯院。
5 「鄉愁」、同右。
6 「僑領」、原作・演出、一九八五年八月三日、日本五殿場市・東山荘講堂。

八　書評（『台湾青年』掲載、数字は号数）

1 周鯨文著、池田篤紀訳『風暴十年』1
2 さねとう・けいしゅう『中国人・日本留学史』2
3 王藍『藍与黒』3
4 バーバラ・ウォード著、鮎川信夫訳『世界を変える五つの思想』5
5 呂訴上『台湾電影戯劇史』14
6 史明『台湾人四百年史』21
7 尾崎秀樹『近代文学の傷痕』8
8 黄昭堂『台湾民主国の研究』117
9 鈴木明『誰も書かなかった台湾』163
10 張文環『地に這うもの』180
11 加藤邦彦『一視同仁の果て』226
12 滝沢毅『中国革命の虚像』229
13 黄昭堂『台湾総督府』248

九　論文（各誌）

1 「三伯英台在台湾」、『華僑文化』（神戸）、一九五三年一二月、

一九五四年一月号連載。
2 「台湾光復後的話劇運動」?、一九五四年四月。
3 「連雅堂で想うこと」、『台湾公論』四号、一九五九年一二月。
4 「ある台湾独立運動者の主張」、『世界』一九六二年四月号。
5 座談会「引き裂かれた民族」、『現代の眼』一九六二年一一月号。
6 「台湾独立運動の真相」、国民政治研究会講演録、一九六二年六月八日。
7 「日本の台湾政策に望む」、『潮』一九六四年新春特別号。
8 「ライバルの宿命をもつ日中両国」、『評』一九六五年四月号。
9 「日本・中国ライバル論」、『自由』、一九六五年七月号。
10 「反面教師」、『日本及日本人』一九七〇年陽春号。
11 「ひとつの台湾」、『経済往来』一九七一年二月号。
12 「台湾人の見た日中問題」、『評論』一九七一年五月一五日号。
13 「台湾は愁訴する—島民の苦悩と独立運動の将来」日本政治文化研究所、政治資料、一〇二号、一九七一年九月。
14 「台湾は台湾人のもの」、『自由』一九七三年二月号。
15 「台湾人元日本兵の補償問題」、『台湾同郷会新聞』一九八一年三月一日号。

十 『台湾青年』論文・随筆（数字は号数）

1 「台湾の新聞かく安保闘争を論ず」3
2 "Gua wu khi Tapani" 4
3 「パスポートを取り上げられるの記」5
4 「兄王育霖の死」6
5 「謝雪紅の教訓」6
6 「破産に瀕せる台湾の教育」8～9、11、17、21、25連載
7 「国府は沖縄の日本復帰に反対する」9
8 「寓話と堕した『大陸反攻』——蔣経国の矛を以って蔣介石の盾を攻む——」9
9 「呉主恵、この唾棄すべき文化幫間」13
10 「台南の二・二八と私」15
11 「台僑は独立の母」24
12 「兄の死と私」27
13 「『偏安』映画の標本——『薇薔的週記』を見て」30
14 「台湾民族論」35～37連載
15 「編集長を辞めて」38
16 「劉明電に見る中華人民共和国系台湾人の意識構造」158
17 「祖国台湾」（詩）161
18 「二・二八の台湾史的意義」162
19 「台湾ハ古ヨリ中国ニ属セズ」162
20 「この愚かしくも哀れなる『祖国救済幻想』——『林歳徳氏の生活と意見から』——」165
21 「『台湾人の身分をかくさねばならぬ』ことについて——呉濁流評その一——」167
22 「蔣政権統治下の呻吟——呉濁流評その二——」168

23 「観念的中国人と実質的台湾人のあいだ――呉濁流評その三――」169
24 「日本側に民族偏見はなかったか」174
25 「海洋国家の建設――眼を大陸でなく大洋に向けよ――」183
26 「倉石武四郎先生と私」185
27 「選挙恐怖症にかかった蔣政権――台湾の地方選挙、一括延期――」187
28 「風波をよぶ台北の洪水防止計画」194
29 「特務になった日本青年の話」195
30 「営林処が立ち退きを迫って放火――阿里山からの泣訴」196
31 「ペキンの児戯に類する謀略」198
32 「いい加減に迷妄から醒めよ――蔣政権派『華僑総会』役員に忠告」205
33 「恒例『光復節』の二重奏」206
34 「私のアメリカ旅行報告」206、208～212、214連載
35 「台湾人よ、坐して死を待つのか」220
36 「二・二八の三つのポイント」222
37 「韓愈名誉毀損騒動」224
38 「『台湾青年』二〇年の回顧」231～233、234連載
39 「台湾『民主化闘争』関連年表」234
40 「繁栄の裏の腐蝕――台湾中部のPCB中毒事件」236
41 「恩人・竹林貫一氏の死を悼む」236
42 「越えられぬ溝」238～239連載
43 「陳若曦の彷徨は何を教えるか」241～243連載
44 「『台湾共和国』の文化政策」244
45 「台湾人を愛し通した池田敏雄さん」247
46 「第二代中国人の意識形態」251～254連載
47 「葉島蕾と彼女を陥れた特務たち―海外の『第二代中国人』」255
48 「台湾のグリーンカード」255～257連載
49 「『建国七〇周年記念』の恥さらし―あるインチキ出版の話」262
50 「蔡培火は長生きしすぎた」269
51 「敵は大中国主義」272～276連載
52 「台湾人が目覚める」282
53 「狂った社会の中の哀れな精神病患者」284
54 「タカサゴ族、進化それとも消滅」285～286連載
55 「台湾人元日本兵士の補償問題六〇年度予算に検討費つく」292
56 「アメとムチの文化政策の一環――文献委員会の功罪」293
57 「藤堂明保先生の思い出」294
58 「漢字のアリ地獄」295～296連載
59 「漢字の死亡公告」297
60 「大中国主義と台湾民族主義の戦い―蔣政権四〇年の統治」298
61 「康寧祥氏の『和平』見解のナゾ」299（実質上の遺稿）
62 遺稿「『一寸の虫にも五分の魂』の戦い」300
（来月号に補遺を掲載）

弔辞

王先生、わたくしが最初に先生にお目にかかったのは一九四六年、台南一中の教室においてでありました。あのころ先生は台南一中で歴史を教えていらっしゃいました。二・二八事件という台湾史で最も重要な大事件を経て二年後、先生のお姿が台南一中から消えました。わたくしが再び先生にお目にかかったのは十年後、東京にきてからです。この再度の出会いは以後のわたくしたちの運命を決定づけました。忘れもしません。一九五九年秋から、先生のご自宅で台湾の将来についての協議を重ね、翌六〇年の二月二八日に台湾青年社を結成しました。今日の台湾独立聯盟日本本部がこうして産声を挙げました。同志たちの衆望を集められた先生は初代の委員長になられ、一九六三年春までの最初の四年間に日本本部の礎を築いて下さったのです。台湾独立聯盟にとどまらず、台湾人のひとりとして先生に御礼申し上げます。先生、ありがとうございました。

委員長をやめられたあと、先生はわたくしたち若い人びとのご指導に当られたにとどまらず、それこそ一兵卒として独立運動に挺身してこられました。指導者には仲々見られないタイプであります。先生ありがとうございました。

「焼えて尽きたし」と、先生は今から二カ月前、台北高等学校の同窓会でそう書き残されましたね。この一年、先生は同じような意味のことをわたくしたちになんども話されました。王先生、あなたは戦死されたのです。わたくしたち同志一同、そう思っています。台湾独立運動という戦さの場で先生、あなたは散ったのです。

この夏はとくに暑く忙しい夏でした。台湾独立聯盟のあの一連の長い会議。狭心症という大変な病気に罹っておられたにもかかわらず、朝から深夜にかけての、しかも数日に及ぶあの長くて緊張した会議を通して、積極的にご意見を述べられました。

八月には世界中の同胞が日本に集まり、御殿場で世界台湾同郷会の年次大会が開かれ、先生はご自分の書かれた劇を監督、演出され、若者たちを励まされました。四日間の大会が終わったら、こんどは台湾人元日本兵士の補償問題についての東京高裁の判決公判です。先生、あなたは胸に狭心症という爆弾を抱えながら、猛烈に働き、戦いつづけました。そして討死されたのです。

つい数日前の九月六日、台湾独立聯盟執行委員会が開かれました。どうしたわけか、先生はお説教を始めました。「勉強してくださいよ。良い論文を書いてくださいよ。お願いします。」この「お願いします」を何回もつづけられ、それはもう哀願そのものでした。わたくしは実に厭な気分がしました。これが実に、先生の遺言そのものだったのです。この四八時間後に先生は発病され、そしてさらに二四時間後に逝去されたのです。机の上にご執筆中の草稿を残されたままにです。

ここに先生の御霊に誓います。

台湾人の最終的勝利をめざして一層奮励努力します。

先生、長いあいだのご指導ありがとうございました。どうか安らかにお眠りください。

一九八五年九月一一日

葬儀委員長　黄　有　仁

弔辞

謹しんで先生にお別れのご挨拶を申し上げます。

台湾人元日本兵士の補償運動を始めてから十一年、提訴してから十年にして第二審の判決があり、これから政府に対して働きかけようという段階で先生に永遠の旅路にたたれ、ただ呆然としており方向舵を失って大洋にさまよう小舟のような心境です。

先生行かずに戻って下さい。「考える会」の一同は皆そう叫んでおります。

今、運動を振りかえってみますと十一年前先生は台湾人元兵士の為に運動体として「台湾人元日本兵士の補償問題を考える会」を組織され、そして世論を喚起し、自由人権協会の協力をとりつけて裁判に訴え、更にまた国会では超党派による議員懇談会発足の基礎をもつくられました。以来今日まで「考える会」の事務局長として補償実現に力を尽され、この歴史に残る運動の記録を会報と資料集に編纂されました。このことは後世に語りつがれる足跡であり、先生の偉大な人格を物語る記録でもあります。

この運動に対する先生の功績はあまりにも偉大で、つたない筆舌では表し得るものではありません。

先生は大学の教授として、又他に重大な運動をかかえられながら更にこの補償運動にも心血をそそがれ、先生の人生を縮められたことは私達は充分に承知いたしており、先生にも又残された奥様を始めご一族の皆様にも申し訳なくなんとお詫び申し上げてよいか言葉もありません。

先生なき後は微力ながらも私達は更に団結を固めて目的達成まで闘いぬくことを誓います。先生心おきなくこの世の疲れを霊泉においていやして下さい。先生ありがとうございました。ご冥福をお祈りいたします。

昭和六十年九月十一日

台湾人元日本兵士の補償を考える会　弁護士　秋本英男

弔辞

王君、先ほどとつぜん黄さんから弔辞をいただきたいというお話があり、用意してくればよかったのですが、意を尽さないと思いながら、一言弔辞を述べてお別れの言葉と致します。

私は鹿児島に帰っておりましたが、一昨晩の十一時に王君の訃報を聞き、急きょ予定を変更して昨日の一便で上京し、昨晩はお通夜に列し、今日は最後のお別れを余儀なく致す次第であります。急な御逝去でなんと悲しみを申し上げてよいかわかりませんが、まったく痛恨のきわみでございます。君は五月に東京女子医大病院に入院して精密検査を受けた体験を通じて「人間ドックに入ってあらゆる検査をしてもらった方がいいよ」と私にすすめてくれました。つい先月八月のことです。私はさっそくおすすめに従って東京女子医大病院に十日間の徹底した人間ドックに入ったわけでございますが、君はわざわざ私の病室を訪ねてくれました。そして冗談をまじえながら、これでお互に長生きしようじゃないか、と語りあったのはわずか三週間前のことでした。

君と知りあったのは台北高等学校という今はなき旧制高校でございますが、お通夜には吉江君、今日は蔵本君等と同期の諸君をはじめ、台北高校の同学の士が多数見えております。蛮カラな気風でしたが、自由の鐘の音を皆こよなく愛し、またヒューマニズムのみなぎった学園でした。植民地なるが故に、いち早く軍国調の風潮が押し寄せた時代でございましたが、他の学校とちがって自由を守り、人間愛を教えられたユニークな学園であったことを、いまだに誇りに思っております。そのような土壌で、私は君のお兄さんにあたる王育霖君と同じクラスで学びました。お兄さんははじめての台湾出身の検察官として、京都地検に勤務した歴史に残る人物でございます。先ほどお話がありましたように、お兄さんは二・二八事件で犠牲になり、その二年後に君は香港へ脱出し、さらに日本へ密入国してきました。私が内閣の参事官として総理官邸に勤務していたときのことでございます。とつぜん王さんという方が訪ねてきておられると知らされ、私の執務室でお会いしました。君は今日、明日にも

密入国で逮捕されてもおかしくない、という事態でした。

すぐ自首することを、私は君にすすめました。私はその場で警視庁の公安部長に電話し、明日君が自首するので、手荒な扱いをせぬようお願いしたことを覚えております。そして翌日、君と一緒に警視庁へ出頭しました。警視庁側も君の誠意を汲んでくれたと思います。裁判になりましたが、君の恩師の倉石先生、刑法の小野先生、それに私の三人が保証人になって、君の日本滞在が許可されたのでございました。

その後、君は明治大学において教育の道に励みながら、台湾独立のために人生を捧げ尽し、また台湾兵の補償問題で東奔西走されました。この補償問題でまた私とめぐりあったわけでございます。そして、同期の吉江君が東京高裁の裁判長として、裁判の上では大変めずらしい思い切った勇気のある判決を出していただきました。台湾兵は日本国籍がないというただその一事で補償をはばまれましたが、なんとしても彼らは立法により救済されなければならない、という勇気ある判断でした。

君と吉江君と私はそれぞれ立場がちがいますが、この三者が一体となったとき、はじめて台湾兵問題は片づくんだ、と共に考え、そう願いつつ、君は体に無理をしながら駆けずりまわっていました。君が台湾からきた人たちを親身になって世話をしたり、忙しく動きまわっているのを、私は目のあたりに見ております。それが君の死期を早めたのではないか、私はそう感ずるのでございます。この問題は実は、日本人の真価を問われる問題でございますから、われわれは君の遺志をかならず実現させねばならない、と思っているのでございます。

学問の世界においても、また人間的なつながりおいても、日本と台湾のきずなをより強めて行こう、と君が必死の努力をされたことは、日本と台湾の関係者は皆よく存じております。その君はついに祖国の地を踏むことなく、今日を迎えてしまいました。君が台湾に帰れるときが、やがて、きっとくるでしょう。それまでは長く住みなれた日本で、安らかに安らかにお眠りください。以上、私のお別れの言葉と致します。

衆議院議員　有馬元治

弔辞

貴方の還暦祝いを国際文化会館でやられた時、私が祝辞を述べたのも、つい最近の事だと思うのですが、あれからもう二年たってしまいましたねえ。

あの時、私が申し上げた言葉。貴方は、はっきり憶えておられると思います。それは、「たとえ、貴方の生前に、台湾の国が独立しなくても、又ここに集まっておられる多くの台湾の人達、独立運動に挺身される人達、たとえ貴方がたが生あるうちに、台湾の独立の成功を勝ち取る事が、不幸にして出来なかったとしても、台湾人が台湾語をしゃべり、台湾の言葉を貴方がたの子孫にしゃべり継いで行く限り、必ずいつの日か台湾は独立する。民族の原点は、人種でも、国籍でもない。言葉なんです。文字なんです。このアイデンティティの最も具体的な証明が、即ち〝独立〟なのです。

その民族の最も骨幹である台湾語、その台湾語の辞典を、台湾人にして、初めて貴方はお書きになって出版された。

我々日本人にとって、漢字は、漢民族から、大陸から渡来したものである。又、カタカナは、漢字を基本にして作ったものであります。が、ひらがなは、日本人が作った文字である。そのひらがなの発明者は、弘法大師と言われている。日本史にサンとして輝く日本文学の創始者、弘法大師、貴方は弘法大師に匹敵する。台湾史に燦然として輝く金字塔を残したのです。そして、願わくば、台湾独立宣言が、貴方の言葉で、貴方の手で書かれる事を」と言ったのを、昨日の事の様に憶えています。

私は、今、世界中どこにでも行く事が出来ます。だが、ただ一つ、台湾政府は、私にビザをくれません。

幼少時代を過ごした台湾は、私にとって、第二の故郷です。かつて私が麻布ハイツアパートに住んでいた頃、

十数年前、台湾政府から招かれた時、貴方と連盟の幹部の方々、数人が私の家に来られて、「先生頼みます。行かないで下さい。台湾に行くという事は、何を意味するか、御存知でしょう。先生が台湾に行かれたら、私と私の仲間も、どれほどがっかりする事か。どうぞ、こらえて下さい。」と、夜を徹して、涙乍らに訴えられ、私は台湾に行く事を断念しました。

そして、あれから十数年、先月五日、貴方と張燦鑾氏、それに許世楷氏の三人と会ったのが、まるで昨日の様に感じられます。その時、貴方は「私は、このごろ死が近づいて来た、何かもうじき死ぬんじゃないか、ちょいちょいそう思うんです。と言うのは、時々、心臓がしめつけられる様に苦しい。医者に見てもらっているけれど、何か、長生き出来ない様な気がする。だけど、台湾が独立するまでは何としても死ねない。死ぬのはいやなんです。死にたくない。だが、人間にはいつか死が訪れる。死を考えると、私はつらくてつらくて仕様がない。先生、どうしたら死を迎える事が出来るでしょうか。」と、貴方から問いかけられて、私は何とも答えようがありませんでした。

いや、死と言う問題は、私も常に考えています。私が二〇年ばかり前に、胃癌の手術をした時、毎日、真剣に死と向かい合って、苦しい何日か、何か月かを過ごした事を思い出します。が、やがて何年かたち、その時の苦しみは忘れてしまったけれど、もう還暦をとっくに過ぎ、最近私と同じ年の人達が次々に死んで行くのを見るにつけ、私もいつ死んでも不思議はない年なんだ、と思うと同時に、私自身も我が人生に悔いはないか、私の人生はこれでよかったのだろうか、これからの半生はどう生きねばならないか？〝死と生〟という問題。年とともに、深く考えている毎日です。たまたま、つい最近、吉川英治さんの新平家物語を読み返してみました。確か三回目です。

本というものは、自分の若い時に読んだ感じ方と、又、年取って読んだ感じ方と、ずいぶん違うものだなあ、感ずるところが違うものだなあ、と言う事を知るものです。

最近、読んだこの新平家物語。人間の無常観をしみじみと味わいました。源氏に亡ぼされた平家、特に印象的

だったのは、平清盛の妻の弟、時忠の一生と言うか、生き方。又、頼朝の弟、義経の最期。これも又、悲劇的な一生でした。清盛につながる平家の武者達の、屋島から壇之浦にかけて。そして生き残った人達の死に様。

本当に〝祇園精舎の鐘の声諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす。げに、驕れる平家、久しからず。ただ、春の夜の夢の如し〟

本当に人生と言うのは、人間の一生は、土から生まれ、土に還る。

何人(なんぴと)と雖も、死からまぬかれる事は出来ない。生まれた時から、人間は執行日を知らされない死刑囚だと言われますが、この死の問題、これは生きとし生けるすべての人が、死ぬまで悩み続けなければならない難問題だと思います。

だが、王先生、何かこの本で得るところがあると思うので、是非読んで頂きたい、私は来週アメリカに行きますが、この本を二、三日うちにお送りしましょう、と言って別かれたのが、つい昨日か、一昨日だったような気がします。

私は先週、アメリカから帰って来ましたが、昨夜、黄有仁さんから、王先生の悲報を聞かされて、愕然、文字通り、ただ愕然と言うか、本当に、人生のはかなさを思い知らされたのでした。

貴方と知り合ってから二十数年。人間、生涯、本当に許し合える心の友と言うのは滅多にいるものではありません。貴方は、本当に数少ない、私の許し合った心の友でした。

民族の違い、国籍の違い、言葉の違いを、一切乗り越えて、本当に心から許し合った数少ない私の友でした。

人間、年取って、最も尊い財産は、金でもなければ、社会的地位でもありません。

私の台湾への執着、台湾独立への執念も、貴方との交遊によって倍加したのでした。今ここに、私は貴方を失って、どんなにつらいか。

又、生涯を台湾の独立に賭けて生き抜いて来た貴方も、独立の栄光を見る事なく、遠く異境の地、東京で、志半ばにして倒れたと言う事は、さぞや無念でしょう。が、しかし、ここにおられる多くの貴方の後輩達が受け継

いで、貴方と同じ価値観、同じ人生観、同じ世界観のもとに、台湾独立の情熱を燃やし続ける事でしょう。私も及ばず乍ら、貴方の生前に変らぬ熱意をもって、貴方が愛し、信頼し続けた、貴方の後輩の方々を、貴方と変る事無く、共に台湾独立の為に、協力する事をここに誓います。

どうぞ、安らかに眠って下さい。

昭和六拾年九月拾日

ラジオ日本社長　遠山景久

弔辞

家に帰りつくと、驚愕すべき消息が私を待っていました。王育徳先生、それは、もっとも良き先輩、そして同志である先生がお亡くなりになった、という訃報であります。

実に思いもしなかったことであります。前回の入院からお帰りになって以来、先生のご健康はすでに回復なされたように見うけられたし、富士山麓における世界台湾同郷会総会で、先生はめざましくご活躍なさっていました。私のこのたびの出張――この公用出張の成果をご面前で報告できないことは、まことに残念でありますが――の直前における執行委員会で、先生が餞として激励して下さったお言葉がいまだに耳朶をめぐり、先生がお元気そうに台湾人元日本兵士補償訴訟第二審判決に関してご報告なさり、また今後の努力すべき方向をお述べなさったご様子は、いまだに眼前にありありと浮かびます。どうして帰ってきた時、先生にお目にかかれないことになることに思い至ることができましょうか。このたびの出張では遠地を訪れ、飛行機の離着陸が十数回を下ら

ず、出発前に先生は私の危険を心配して下さっていたのに、思いもはからず神様は先生をお先にお召しになりました。

最近、先生は文章を書き、お話をなさるごとに、よく「これは遺言である」とご強調なさり、私は時にはそれをいい過ぎであるとさえ感ずる程でありましたが、それはもうすでに今日をご予感なさっていたのでありましょうか、後輩としてそれに気付かなかったことをお詫びいたします。先日、先生と張燦鑾台湾独立連盟主席に同道して、先生のあるご親友をお訪ねした時、席上先生は、「余生はもう多くない。最近は機会あるごとに、いかにしてこの残りの多くない時間をもっとも有効に台湾独立運動に使うか、を考えるようになった」、とお述べになっていましたが、確かに先生は何かをご予感なさっていたようであります。前回の退院後、先生がいっそう独立運動にお励みなさっていたことは、同志たちのよく知るところであります。

このようにたゆまず運動のためにご努力なさるところが、台湾独立運動家としての先生の偉大なところであり、台湾独立連盟盟員の中で、運動のために書いた文章の字数がもっとも多く、人を訪ねて募金した回数がもっとも多いのは、王先生であります。しかし、王先生がさらに偉大なのは、先生は台湾独立連盟日本本部の創始者であり、第一代の責任者である上、運動従事者の中で年齢がやや高い世代に属しているにかかわらず、責任者の地位を退いてからも、新任者によく協力されたことであります。また、先生は終始組織の忠実なメンバーであり、台湾人がいっそう巨大で有力なる組織を必要としている今日、身を以て模範を示されたわけであります。これらのことに鑑みて、連盟日本本部中央委員会は、本年八月の定期委員会において、王先生の運動および連盟に対するこのような貢献を表彰することに決定、日本本部二十五周年集会において、先生に表彰状をお渡ししたのであります。

主先生、先生は死を予期し、それを視ること帰るが如しでありましたが、ただ一点先生をして容易に冥目せしめ得なかったことは、蔣政権がなお存続し、台湾人が未だ独立を獲得していないことにあったと思います。お約束いたします。必らず先生のご遺志――それは本来私の宿願でもあります――を継ぎ、台湾独立運動に努力いた

します。

一九八五年九月一九日、出張より帰着した夜遅く。

台湾独立連盟日本本部委員長　許　世　楷

ご会葬御礼

故　王育徳博士の逝去に際し、雨中ご多忙のところを御会葬賜り、また御鄭重なご厚志、ご献花、ご弔電などをいただき、誠に有難く厚く御礼を申し上げます。

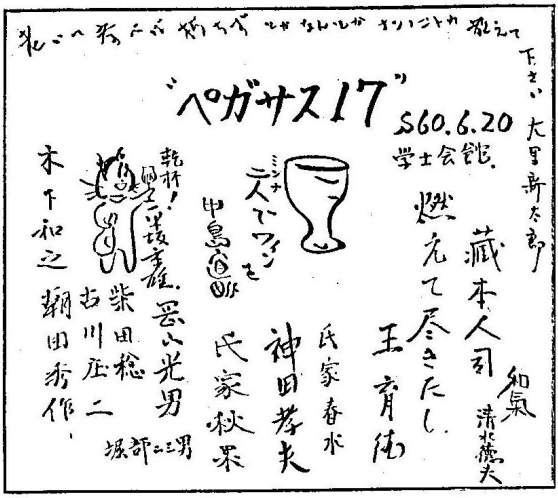
享年六十一歳、台湾独立運動にすべてを捧げ尽した王先生の生涯でした。蔣政権の命脈まさに尽きんとしていると思える今日、台湾独立の日を見ずに逝かれたことは無念のきわみであったことでしょう。われわれも残念でなりません。王先生の遺志をつぎ、盟員一同一致協力して台湾の独立を達成することを誓います。王先生の生前と変らぬ皆様の御支援と御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。参上して御挨拶申し上げるべきところでございますが、王先生が生み育てられた本誌の紙面をもって御礼を申し上げます。

一九八五年九月十五日

葬儀委員長　黄　有　仁

亡き夫を偲んで

王　雪梅（王育徳博士夫人）



死を予期したかのように、王先生が書き残した色紙

育徳の急逝でこの十日間は悪夢のように過ぎました。九月八日（日曜日）二人だけの夕食後、発作を起こし、救急車で東京女子医大に運び込まれました。すでに意識はなかったものの、脳のCT検査結果は異常なく、また心臓も心電図等安定しているとのことでした。一晩中、心臓の再発作が起きない事と意識をとり戻す事を祈りつづけました。

翌朝九時半頃、主治医が、心臓も安定し、意識も少しずつ戻ってきて、右手、左手がちゃんと判ると話してくれました。二時半に私と娘の二人が面会を許され、今思えば、主人と最後の会話をかわしたのでした。「パパ」と呼ぶとすぐこちらを向いたので、私は「良かったわね、もう少しだから頑張ってね」と励ましました。すると「今何時？」ときくので、「二時よ」と答えると「二時?!」と目を見ひらいて驚きを表わし、「よく寝たなあ」と言いました。主治医が「王さん、僕何先生かわかる？」と尋ねると首を横にふり、「もう長くないよ」と言うのです。聞きとれずに娘が「何て言ったの？」ときくと「もう長くないよ」とはっきりと覚めた様につぶやきました。娘が後であの一言は意識朦朧の中ではなく、正気のようだったと言うのです。その後、医師が「王さん眠いの」と聞くとうなづくので、もう退室するよう医師に促されて、娘の「パパ明日綾と浩人つれて来るから

ね」という言葉にうなずく主人を後にしたのです。

医者は、意識も戻ったし、心臓も安定しているから帰って休養を取るよう私達に勧めました。私達もほっと胸をなでおろし、病院から車で五分の連盟の事務所へ行って休んだのです。まさかその後急変が襲うなどとは露ほども知らずに……。

五時二五分頃再び病院へ行こうとしていた矢先、医師から電話があり、すぐ来るように言われました。駆けつけた時にはもう手遅れでした。医師の話では四時四七分にシーツを直した看護婦が部屋を出ようとした時「苦しい」と一言いったきり、息をひきとったというのです。心臓マッサージをしたり、ペースメーカーを入れたり出来得る限りの手を尽しても及ばなかったそうです。家族、親族、連盟の方々の集まったところで、病室へ通され、医師が心臓マッサージの手を止めると、心電図がツ――とむなしく一本の線を描いて、六時四二分に永眠致しました。

想えば、病気一つせず「俺は連盟で一番元気だ」と自慢していた主人でしたが、今年の四月出勤途中、駅の階段で胸苦しさを覚えることが重なり、訪ねた明治大学の診療所で、狭心症の疑いがあると診断されました。その後娘婿の尽力で、心臓に関しては日本一と言われる東京女子医大に紹介して貰い、診察して貰った結果、即刻入院するよう言われました。それでも主人は、「夏休みではいけませんか」と交渉するなど、自分の体よりも大学の講義や台湾人元日本兵士の補償問題の判決、世台会などの方を大変気にかけているのでした。

二週間の精密検査の結果、左冠状動脈の一部に血栓を生じていることが判明しました。しかし、今回は手術の必要はなく、薬を服用して様子を見ることに治療方針が決められました。主人は退院するともうすぐ普通通り、大学に出講しはじめ、もっと休養するように勧めても一向に聞き入れません。また、薬のおかげか、発作も起こらないので、本人も周囲の私達も油断しておりました。今夏の猛暑の中、重なる大切な用事を一つ一つこなしていったのです。

この夏の世台会では、世界各地から集まった同郷の方々が、主人を見つけては握手を交し、朝早くから夜遅くまでスケジュール一杯の充実した四日間を過ごしました。終った後も主人と私は二週間位の間、世台会の演説の内容、またお一人お一人の顔を想い浮かべてその話ばかりしていました。「もう安心ね。貴方の目的は達成されたよ。もう貴方を必要としないね」と私は冗談ともつかず云ったものです。想えば、この世台会は主人にとって、長かった独立運動で、一番充実して満足し、安堵したことと思われます。八月はその後二六日に元日本兵補償問題の判決があり、その前後もハードスケジュールをこなしておりました。

私にとって心残りは、博士論文（閩音系研究）を恩師、服部四郎先生に、先生のお元気なうちに手直しして本にするようにと言われておりましたのに、その仕事を残していってしまったことです。

育徳は人生観について、遠山景久先生に深い薫陶を受け、殊に、「教師は教壇で死に、革命家は、敵の銃弾に倒れることが最高だ」という教えに感銘を受け、自分もそれを理想としていました。

ほとんど苦しみもなく他界したことを、主人の姉は、「徳は良いことをして来たから神様が大往生を与えて下さった」と言っております。

主人は私利私欲のない人で、台湾独立運動のためにはあれほど忍耐強く募金活動をしていたのに、自分のお金には少しも欲がない人でした。家もテーブルも椅子も古くて私が変えたいと言っても、「今のままでまだ使える。贅沢をしては申し訳ない」と言って受けつけない人でした。

よく人に「王先生は厳しいでしょう」と聞かれるのですが、家庭では自分の部屋のそうじやフトン干しをしてくれ、孫が来る日は、ぞうきん掛けをして待っている程でした。「おい孫はどうした」と毎日のようにきき、とにかく孫のことは全てが可愛いくてたまらない様子でした。「あの二人の孫はわしゃをなぐさめるために生まれてきたようなものだ」と話していました。ところで亡くなるひと月程前、「おい俺が死んだらお前どうするんだい」ときいたのです。私が即座に「私なら大丈夫よ。心配しなくてもいいよ。」と答えますと「そうか、それを聞いて安心した」と言いました。また、その頃台北高校のクラス会で色紙に「燃えて尽きたし」と書いていました。この夏娘にも「パパはいつ死んでも悔いはないよ。いろんなことをしたから」と話したり、姉に「僕は親父以上の仕事をしたからもういいよ」と言ったり、今思えば死期を悟っていたかのようです。

主人を可愛いがって下さった代議士、有馬元治先生はじめ、日本の中国語学会を担う東大時代の友人の諸先生、台高の友人の皆様、明治大学の諸先生、台湾同胞の皆さん、私達夫婦の愛する明大・王ゼミの方々、竹陰会（囲碁の会）の皆さま、実に多くの友人知人の方々が、通夜、告別式においで下さいましたこと、心より厚く御礼申し上げます。

生前皆様から受けた御恩、友情、御好意に深く御礼申し上げます。

最後に私の油断と無知のために、台湾人にとって、まだまだ働かねばならぬ人材を失なわしめたことを深くお詫び申し上げます。

皆様の今後の御活躍と御健康をお祈りしてペンをおきます。

一九八五年九月一九日

燃えて尽きた父

王　明　理（王育徳博士次女）

〝燃えて尽きたし〟と願った父が、まさに炎の燃え尽きるように亡くなって十日が過ぎました。常にそばに感じていた大きな父の存在を失って、今だに信じられない気持ちです。

数々の課題を残して、どんなにか心残りであったろうと思います。台湾をこよなく愛し、また、義理人情に厚い日本人を敬い大好きだった父でした。

六一年という短い人生でしたが、その一生は誰にも負けないほど中身の濃い、立派なものであったことは誇れるものと思います。父

は誰よりも多くを考え、それを実行に移し、育て上げる忍耐強さと統率力を持っていました。

その父が何よりも心血を注いだ台湾独立運動の母体「台湾青年社」が創立されたのは私が六才頃、ものごころがつきはじめた時期でした。学校から帰ると玄関には、何足もの靴が脱いであり、活気に満ちて、本の発送や会議が繰りかえされていたことを思い出します。

父が産んで育てた「台湾青年」は途中で幾つかの試練を経て、今日では大きな台湾独立連盟に成長しました。また、今年八月の世界台湾同郷会では、台湾人の台湾人意識が、しっかりと定着したことを見て、父はとても喜び、何か、子供が一人立ちしていくのを見届けたような心境だったようです。

他にも、自分の研究である「台湾語の音韻表示」では日本一の栄誉である東大の文学博士号ももらいましたし、明治大学での中国語教育にも、大学一の厳しい授業と言われるほど熱心でした。また、父の義憤から発した台湾人元日本兵士の補償請求運動も、いつしか国会でとりあげられ、広く世論に訴えるまでに大きな運動となりました。

いくつもの面を持ち合わせた父でしたが、しかし、ただ一途なだけではなく、何か達観して、楽しんでいるような顔があったように思います。好きな演劇のように、自ら脚本を書いて主演しながら、片そでで監督していたのかも知れません。

よく私には「ケ・セラ・セラ」と言って物事の悪い面ばかりでなく良い面を見い出すようにと教えてくれました。

父の人生はあたかもハレー彗星の如く、地球に現われて、台湾人を覚醒し、勇気と示唆を与えて消えていきました。そして、育徳という名の示す通り、たくさんの後継者達の徳を育てて行ったとは言えないでしょうか。

娘としては何も父の仕事を継いでいない事が残念です。今からでも、皆様に教えていただいて、少しでもこれからの仕事の手伝いをしたいと考えています。

そして、また、何より、唯一父の血を引いている二人の子供を無事に育て上げる事が、娘として最大の課大であり、父の供養になると信じています。

最後に、長い間、家族よりも友人よりも深い結びつきで父を支えて下さった同志の方々に、心から御礼申し上げます。今後も台湾のために心を合わせて邁進して下さるよう、また多くの方が関心を持ち続けて下さるよう、父にかわりお願い申し上げます。

燃えて尽きたし　とて尽きし
父の手　とれば
切なる望み　宿るらむ

一九八五年九月一八日

王育徳文学博士との御縁

法学博士・弁護士　向山　寛夫

私の博士との縁は、いわば宿命的なものである。

私は、大正八年（一九一九年）三月に四歳で両親、姉兄と台北に移り住み、昭和六年（一九三一年）一〇月まで一三年、同地で幼少年時代を過ごした。台湾は、私にとって第二の故郷であり、私は、博士と同郷人の光栄を有する。亡父の向山斧太郎と次姉の土屋節子は、通算して三〇年近く台北州立台北第三高等学校の教諭を務め、台湾人女子教育に当った。兄の向山猛夫は、台湾総督府の台北高等学校文科甲類（第一外国語が英語）と東京帝国大学文学部支那哲文科（現在の中国文学語学科）で博士の先輩である。

私は、生まれつきの史癖と台湾との縁で湖南省郴県で迎えた終戦の日に、日本の台湾統治と台湾人の抗日民族運動の歴史を書くことを決意し、帰国後に稿を改めながら延えんと書き続けて昭和三六年（一九六一年）に「日本統治下における台湾民族運動史」を学位請求論文として九州大学に提出し、同年一二月一日に法学博士を授与された。

この間、早期の研究成果をまとめた「台湾民族解放運動史」が、民主主義科学者協会編、河出書房発行の「歴史評論」昭和二五年（一九五〇年）一一月号と翌年一月号に分載された。これは、まことにお粗末なもので、今では文化大革命時の郭沫若流に破棄したい論稿であるが、戦後の台湾抗日運動史の最初の論文である。昭和二五年（一九五〇年）は、博士の日本亡命の年である。博士は、拙稿を読んで私を知った。

一〇年後、二年がかりで学位請求論文を執筆中に立寄った神田の内山書店で、台湾青年社編、昭和三五年（一九六〇年）四月一〇日発行の『台湾青年』創刊号が、ふと目にとまり、大正九年（一九二〇年）七月一六日に第一次大戦後の大正デモクラシーの最中、留学生を主に東京在住台湾人の民族運動団体「新民会」の事実上の機関誌として創刊され、後に島内発行の民族紙「台湾新民報」に発展した『台湾青年』を思い出した。死児に会ったような思いで、さっそく買って読んだ。新しい『台湾青年』は博士の苦心経営で発行を続けて現在、台湾独立聯盟の日本での定期刊行誌になっているが、今あらためて読んでみると今を以って過去を語ってはならないが、社説「台湾青年に告ぐ――発刊の言葉に代えて――」の何と楚楚（そそ＝可憐）なることよ。それはとにかくとして、私は『台湾青年』創刊号で「台湾語講座・第一回台湾語の系統」の執筆者として博士の芳名を知った。

こうしてお互いに名を知り合ってはいたが、初対面がいつであったかは、定かでない。しかし、私が学位を取得した直後に博士が拙

宅にこられて長時間あれこれ歓談し、その折に博士に台湾語（閩南語）の研究を完成して学位を取得することを強く勧め、学位請求論文をお貸ししたことが、記憶に鮮明に残っている。従って、博士が学位を取得されたとき、私は我がことのように悦んだ。

博士と私は、お宅が豊島区千早町二―三七、拙宅が練馬区豊玉北四―二五―一で西部鉄道西武線の数駅を隔てて近くに住んでいた。従って、往き来は、甚だ容易であった。しかし、二・二八記念集会などで常に外で会っていたから、私は、昭和五二年（一九七七年）に雪梅夫人に国学院大学法学部の労働法ゼミ生二、三人とビーフン料理の伝授を受けに伺った以外、博士のお宅を殆ど訪ねなかった。

私は、昭和五五年（一九八〇年）四月九日から翌年三月三一日まで一年、現行中国法の調査研究のために、外務省特別研究員として北京の日本大使館に勤務し、約四か月、中華人民共和国の殆ど全土を歩いた。出発までに戦前に多少ならった中国語を博士に一か月ほど教えていただくことになっていたが、赴任準備に忙殺され、出発直前に三時間ほど拙宅で発音の基本を教えていただいたに過ぎなかった。帰国直後に、王育徳、黄有仁、許世楷の三博士に中野の飲み屋で歓迎会を開いていただき、私が中華人民共和国と約二万五千人といわれる在住台湾人の情況を報告し、四人ともども大いに歓談した。これが、水入らずの博士との最後の歓談であった。

昨年いとも盛大な還暦祝賀会に颯爽と臨まれた博士は、巨星の落ちるように忽焉と亡くなられた。私にとっての最大の痛恨事は、刊行直前の学位請求論文「日本統治下における台湾民族運動史」を博士の高覧に供することができなかったことである。

愕然として悲惻の思いに堪えず、小文を以って永年の交誼に対する謝意と哀悼の意を表する次第である。

（昭和六〇年―一九八五年―九月一五日）

王育徳精神と王育徳思想

在日台湾同郷会　会長　黄　文　雄

王先生逝去の訃報に接したのは出張中の九月九日夜。すぐに先生宅へ馳けつけたが、すでに永眠三時間後であった。

十一日昼の告別式で、私は葬儀委員長黄有仁氏の弔辞を聞いて、涙をおさえることができなかった。

王先生と出逢う前から、よく先生のうわさを耳にし、『台湾青年』の創刊号から先生の論述を拾い読みしてきた。

十数年前、私が謝雪紅について論文を書いたとき、王先生に御指導を乞うたら、「あなただから」という前置で、五〇年代からの謝雪紅に関する史料を全部貸してくださった。これほどの史料をよく集められたものだとつくづく感服したものである。

十三年前、諸先輩と一緒に在日台湾同郷会をつくった。私は事務

局と新聞編集の仕事をうけもった。まもなく、インドネシアのモロタイ島で元日本兵中村輝夫が発見された。そのことを契機に「元日本兵の補償問題を考える会」がつくられた。以来、集会があるごとに先生と出会い、はじめのころ、よくあれやこれやと説教され、いやな気持になり、たまには頭にきたこともあった。だが、先生の直言不羈、率先垂範の行動力にほれ込み、畏敬の念は日とともに深まった。

今年になってから、先生は「死」という言葉を口にすることが多くなった。ことに狭心症の疑いがあると診断されて以来、長期の休養をとるどころか、逆に全精魂を台湾人の運動につぎこみ、人の数倍もはたらいたすえ、志半ばにして倒れられた。「書きつつ死んだ」と伝えられるプラトンの臨終にも比すべきであろうか。先生は病死ではなく、壮烈な戦死を遂げられたのである。

先生は死して、二つの貴重な遺産を残してくださった。王育徳精神と王育徳思想である。

一人の台湾人として、いかなる政治権力をも恐れず、いかなる挫折にもめげず、堂々と台湾独立の理想をかかげ、死ぬまで、青年以来の思想と信念を守り通された精神は実にすばらしい。

運動のためなら、つねに率先して人よりも多くの金を出し、人よりも多くの寄金をあつめ、いささかも妥協せず、堂々と自分の理想をかかげ、二十数年来間断なく所信を書きつづけてこられた。誰にもできることではない。言語学者として研究室に閉じこもることなく、街頭に出て、署名をあつめ、抗議デモに加わり、裁判所へ足をはこび、国会をまわり、オピニオン・リーダーとしてだけでなく、活動家としてつねに率先し、青年たちの先頭に立たれた。これは台湾を愛していればこそ生まれてくる行動力ではなかったか。そのために過労になり、死期をはやめられたのであろう。

明確な政治的信念をもち、その目標を達成するために、運動を生甲斐として生涯をささげる言行一致、勤勉実直な精神こそ王育徳精神ではなかろうか。

私は言語学には全くの門外漢であるが、「台湾語は漢語系の一支流である」という王先生の主張に対しては疑問をもっている。同じ閩言系の福州語と厦門語はフランス語とドイツ語以上のちがいがある。北京語で「ノー」の意志表示をする場合には「不」(bu)と口を開けて強く発音する。しかし台湾語は逆に(m̄)と口を開けないで、鼻で発音する。鼻から出てくる発音はいくらがんばってもその(m̄)の一音しかない。

人間の最も基本的な基礎音でさえ、口で強力に発音するロゴスと鼻で発音するものが同じ語系とはなかなか納得できない、と王先生と激論したことをおぼえている。

地方によって、印欧語系の国々以上に言葉の全く通じない中国人にとって、言葉のかわりに漢字が中国人のコミュニケーションのメディアの一つとして大きな役割をはたしてきたにちがいない。漢字文明の栄光の反面その影も大きい。魯迅は死に際に「漢字が滅びなければ、中国は滅びる」とまで言ったぐらいだから、一度王先生に漢字文明の未来について御意見をうかがいたかったが、もうすでに

他界の人となってしまわれた。残念でならない。

王先生は二度も台湾語の表記法を創り、自らの表記法を二度放棄された。そして百年以上も使われてきた教会ローマ字をすすめた。漢字を使いつづける限り、台湾は中国の呪縛から解放されることはできない、と私は信じて疑わない。中国にとってローマ字は国家の解体を意味するものであるが、台湾人にとっては、それは国造りの道具である。

王先生の「台湾は昔から中国に属さない」論は、印象に残る卓論である。清初に編纂された「明史」を読んだとき、台湾は鶏籠国という表示で外国伝日本国に入っているのを発見し、私は思わず膝を打ったものである。

先生の論著の中で、私に最も共鳴をあたえたのは「脱華論」である。「脱華論」こそ政治論から文明論の次元まで高めた卓説である。

十数年前、私は在日台湾学生のミニコミ『台生報』の社説で、台湾人の歴史的な課題として後進性の超克と主体性の再建を強く主張した。私は進歩発展を現代社会の価値として追い求めながら、現代の台湾をその歴史的時間の縦軸に定位し、政治のみならず、経済、社会、文化の後進性を克服することこそ台湾人としての歴史的課題の一つと考えた。そしてその横軸に、外的な強制によって奪われた台湾人の主体性を再建してこそ、はじめて真なる自由を得ることができ、未来の文化を創造することができると信じて疑わない。

そして王先生の「脱華論」こそ、政治的のみならず、中華文化の呪縛から解放することができ、中華的価値からの自由を獲得することができるのではないかと私は思う。

戦後の自主独立の時潮にあって、王先生は令兄王育霖氏の「越人治越、閩人治閩」の主張と思想をのりこえ、百年前の台湾民主国の前近代的国家意識をも超越して、自主独立の思想を一つの政治的理想としてだけでなく、一つの政治闘争として捉え、自らの生甲斐として生涯をささげ、一人の殉教者としてみごとに戦死をとげられた。まさしく台湾人の模範戦士として、その精神と思想は後輩から尊敬をあつめている。

台湾人の知性の象徴として、王先生の存在はあまりにも大きく、その学術的、思想的貢献ははかり知れないものがある。王先生が残された王育徳精神と王育徳思想を、台湾人の知的遺産として、心新たに胸に刻み、微力ながらその継承と発展につとめたい。

台湾のためならなんでもなさった王先生

在日台湾同郷会　副会長　林　耀　南

王先生との初対面は二十八年前のことでした。当時まだかけ出しの私が、新橋駅前のオープンステージで、拙劣なるアジ演説をした直後、先生はニコニコ顔で「とても上手でしたよ!!」とほめて下さ

った。

かねてより先生の御高名を耳にしていたので、温かい激励のお言葉を賜わり、私は先生の崇高な御人柄に感動し、以来今日まで先生を敬愛して参りました。

三年後の一九六〇年に、先生は「台湾青年社」を結成され、私とは組織を異にしながらも、デモ行進や各種集会で、先生に会う度毎に、先生はいつも笑顔で私の近況をおたづね下さり、「一生けんめいやりなさい!!」と必ず激励して下さった。

そして一九七三年に、在日台湾同郷会が創立されるや、先生は御多忙な御体にも拘らず、快よく理事や副会長の役を引受けられ、郭栄桔会長の補佐役や参謀役として活躍され、同郷会の陰の大功労者でもありました。世界台湾同郷会を結成すべきだと提案されたのも王先生でした。

去る八月一日に開催した第十二回世界台湾同郷会に於ける王先生の献身的な御協力は、特筆すべき偉大なものでした。

大会のメーン・イベントとも云うべき「台湾の夜」の催物に苦慮している私の話をお聴きになるや、即座に「よーし私が劇の台本を書いてあげよう!!」と快よく御引受け下さったのは今年の三月頃でした。台本が出来あがったのは四月の末頃で、五月の中頃に先生は第一回の心臓発作に見舞われました。

御入院の直前、私たちの劇の練習のために、狭心症という恐るべき病気をかかえておられながら、一時間という長い台湾語のセリフを録音テープに御自身で吹きこんで下さったことに、私は驚き且つ非常に感動しました。しかも御退院直後、お薬をお飲みになりながら六、七の二カ月間の劇の練習に、一度も欠席なさらず、毎回二、三時間に及ぶ長時間の御指導を賜わり、さらにあの猛暑の中を御殿場まで御出かけになり、八月二日、「元日本兵の補償問題」を各社団報告で御担当下さり、八月三日夜には「僑領」という私たちの演劇を、準備から終りまで細かい点まで御世話下さり、私はただただ感謝感激するのみでした。しかし、劇は私たちの練習不足と過労のために、先生の御期待の三分之一以下の不出来に終り、先生は大そうガッカリなさいました。

幸い大会を無事開催することができたので、先生は誰よりもお喜び下さり、いつものように「よかった!!すばらしい大会でした!!」とおほめ下さいました。

大会直後の八月九日夜の故郭雨新氏の追悼会に掲げる郭氏の御遺影がないので、先生に電話でお願いしたら、又もや快よく御引受下さり、御手許にあった郭氏の写真を御近所の写真屋に引伸しを御依頼下さり、やっと十一日の会に間に合わせることができました。

世台会が終了して私はやっと一服できましたが、王先生は補償問題で連日連夜の御活躍をされておられました。

二審判決当日の八月二十六日の正午すぎ頃、私は早目に高裁の八〇一号室に到着。すると王先生は、すでにあれこれと奔走しておられました。私の姿を見つけられると、先生は私に「林さん、あなたは世台会が終ってホッと一息つけたが、私はこの通り……」と笑顔でさりげなくおっしゃいました。

あの過密スケジュールは、若い健康な人でさえも大変なのに、心臓病を抱える先生にとっては、文字通り命を縮めるものでしたが、先生のあの「台湾人のためなら、どんな苦しい仕事でも卒先実行し、しかも手抜きをしない」先生の御人柄は、常に私たちの敬服の的でありました。

九月六日の午後三時頃、私は八月二十六日のＴＢＳテレビで放映された二審判決のＶＴＲテープを先生にお届けしたのが先生との最後の対面でした。

三日後の夜、御危篤の報に接し、私は特急電車とタクシーで病院にかけつけたが、先生の御臨終に間に合わず、残念で仕方ありません。

あまりにも急な御逝去に、九月九日の夜は、悲しみの実感がわかず、涙もろい私の眼から涙は出ず〝ただショックで茫然自失。翌日の御通夜で一挙に悲しみが吹き出し〟とめどもなく涙が湧き出ました。とくに告別式当日の黄有仁氏の弔辞朗読の時は、男泣きに泣きました。

まさに「巨星墜つ」でなくて何でしょう!!王先生はまさしく台湾独立史上、最も純粋にして偉大なるリーダーであり、私の最も敬愛する人物でもありました。

私は在りし日の先生が、「私はいつ死んでも悔いはないよ!!」とおっしゃったのを一、二度拝聴したことがあります。先生のお言葉には何らの誇張もハッタリもなく、誰しも納得できるほど、先生は台湾のために全力投球されました。

王先生の御遺業はあまりにも偉大ですが、それらを完遂するのがわれわれの責務であることは云うまでもありません。しかし、どの一つを取りあげても、超人的な努力を要するものばかりで、今さらながら先生の偉大さを痛感させられます。

私も及ばずながら先生の御逝去を契機に、せめて同郷会の仕事だけでも、先生の全精魂を傾注するあの姿勢を見習い、懸命の努力をする決心です。

「台湾青年」との出合い

金　美　齢

その日、私はアメリカ人の学者と約束があった。来日する前、彼は台北に留学していて、私が館長秘書として働いていた、インターナショナル・ハウスに住んでいた。タイプの下手な彼に頼まれ、奨学金申請の分厚い書類をタイプしてあげたことがある。一年後、念願通り、ドル支払いの手厚い奨学金を得たそのＭ氏は、律気にも、高級レストランに招待してくれたのだ。

夕方の六時だったと思う。私達は飯田橋駅で落合った。目的のレストランへはタクシーで行った。乗車するやいなや、彼は

「台湾青年と云う雑誌、知ってるか。」と聞いて来た。

「イエス!!今日、丁度受取った所よ。でかける前に、美容院にま

で持っていって、隅から隅まで読んだわ。」
「どう思う?」
「大変にエキサイトしたわ。すごい勇気だと思う。台湾人にもこんな立派な雑誌がつくれるなんて、ただただ感激よ。どんな人達かしら、留学生かしら?貴方はどうしてその雑誌を知っているの?」
「実は、友人が編集者の一人なんだ。僕も関心があって、一般の留学生の反応が知りたいと思っていた。その人達に会って見たいか?」
「ぜひ!ぜひ会わせて!」
前後の見さかいもなく、私は頼みこんでいた。この時の受け答えで、M氏は直感的に私が心から「台湾は独立すべきである」と信じていると見抜いたのであろう。M氏の友人である黄有仁が「独立運動者に会いたいと云う奴なんか、普通はいないぞ。国民党のスパイじゃないのか?危いから止した方がよい。」と云った時、「ミス金は絶対スパイではない、大丈夫だ、保証する」と太鼓判を押したそうである。一九六〇年の春だった。
あれから、数え切れない回数の友人との会食、出入りしたレストラン。殆んどが記憶の彼方に消えてしまったが、あの日の出来事は今でも、はっきり思い出せる。M氏が連れて行ってくれたのは、ロシヤ料理の店だった。高そうな店なのに、彼は常連らしく、白系ロシヤ人のマダムと、ロシヤ語で話したりしていた。アメリカの俳優、フレデリック・マーチが奥さんらしき婦人と来ていたことも覚えている。何しろ、その日は「台湾青年」の創刊号を受取った日なのだから。
一ヵ月以上たって、M氏は約束を果してくれた。大曲にある彼の住いに招待され、そこで私は王育徳先生と黄有仁に紹介された。後で本人から聞いたのだが、黄有仁はM氏の保証があってもなかなか「ハイ、そうですか」と安心できず、胡散臭い女だと思っていたそうだ。それに反して、王先生はこの「奇特」な人間の出現を喜んでおられた様子であった。
「英語ができるとは頼もしい。外国人とよく会うのだが、通訳をして頂けないかな?」
独立運動の指導者と連立って、外国人に会い、通訳したりするにはかなりの勇気がいる。当時、台湾島内外を問わず、政治活動は、台湾人に取って、絶対のタブーであった。躊躇がなかった訳ではない。しかし、反射的に、「ハイ。」と答えていた。生来の強情張りで「敵に後ろは見せない」を信条として生きている。「台湾青年」の発行人として、堂々と名前を出して、蔣政権に宣戦布告をした王先生に、「貴方と一緒にいる所を見られるのは困るのです」と云える訳がない。そんな卑怯な真似は恥ずかしくてできなかった。
かくして、私はシンパとして遇され、行きがかり上、黄有仁が連絡を担当した。当時、王先生以外は全員非公開だったので、すでに私に顔をさらしていた彼が、私の係りになるのは順当だった。と同時に彼は、こいつはじっくり観察する必要があると思ったに違いない。その後、王先生を囲んでの例会で、「金美齢を入会させるや否や」の議題が提出される度に、強硬に反対意見を述べるのは、いつ

も彼だったそうである。

黄有仁の厳しい観察とテストに合格し、私が、晴れて皆の仲間になったのはそれから二年余りたった六十二年の秋であった。王先生のお宅に伺うのはそれが始めてであった。一階の客間ではなく、私は二階の王先生の書斉に通された。入会の誓約書に署名捺印を終えた時、それまで、静かに見守っていた王夫人が、一言「おめでとうございます」と云った。

なぜか私は平静だった。気負いもなく、悲壮感もなかった。創刊号を受取った日の興奮を考えると、あの落着きはなんだったのだろう。目の前に王先生が居た。この人についていけばよいのだ、そう信じていたに違いない。

今年の二月二十八日、私達は「台湾青年」創刊二十五週年を記念した。かつての青年の一人一人は、各々世帯を持ち、職に着き、白髪を増していた。少々くたびれてもいた。四半世紀の長い歳月の間に、脱けていった仲間も二人や三人ではない。その中で、王先生は常に若々しく、意気軒昂であった。初対面の時以来、王先生が独立運動に全身全霊を捧げている姿は、自然の風景であった。それ以外の王先生は考えられないし、考えたこともない。私はその風景が永遠に続くものだと、無意識に信じ込んでいた。私でさえなんとか頑張っているのだから、王先生は常に私達のリーダーとして、先頭を切って戦って行く。これは殆んど信仰であった。

王先生も私達と同じく生身の人間であったと思い知らされて、今は、ただがく然としている。この計り知れない喪失を埋める術もなく、一人一人が路頭に迷う思いだ。この悲しみを私達は永遠に忘れることはできない。

信念を貫いた生涯

孫　明　海

王先生は姿勢のよい人であった。もともとスマートな長身のところを、いつも背筋をピンと伸ばし、顔をまっすぐあげ、颯爽と歩いておられた。二・二八記念集会か何かで話をされるときは、まるで小学生のように真面目に両手を振って演壇にあがり、東海林太郎が歌を唱うときのように姿勢をくずさなかった。いつごろからか夏はパナマの、冬はフェルトの中折帽子をかぶるようになったが（あれは頭のてっぺんからハゲてきたのを隠すためだと、私たちは憎まれ口をたたいたものである）、これも見事に決まっていた。いまどき中折帽子の似合うダンディな紳士などめったにお目にかかれない。

先生のことをこのように書くのは意味のないことではない。あのまっ直ぐな姿勢はまた先生の精神の姿勢でもあるからだ。これは単なる比喩ではない。人間の精神の内包というものは、肉体を通して必ず外に現われるものであると私は信じている。それが「人品」と

か「風格」とかいうものである。先生の場合、「誠実」と「勇気」と「熱情」が結実してあの風格を形づくったのだと私は思う。「千万人といえどもわれ行かん」の気概を絵にしたら、きっと先生のあんな姿になるのではあるまいか。

先生はまっ正直な人であった。その姿勢さながら、ひたすらまっ直に人生を歩いた人であった。先生はおよそ人を欺したり、策略を弄したりすることのできる人ではなかった。これはもう体質的なもので、潔癖症といってよい。

先生の強烈な台湾民族主義は抜きにして、この一徹な正直さだけから考えても、蔣政権支配下の台湾、あの嘘で塗り固められた腐敗の社会に生きていくことを先生はいさぎよしとしなかったであろう。周知のように、二・二八事件のあと先生はひそかに香港に逃れたのであるが、これは別に逮捕状が出ていたとか、追いかけられていたからとかいうわけではなかった。先生は本能的に危険を感じたのだと私は思う。中国人がやってきて以来、台湾は嘘を日常茶飯事とし、怒ることを忘れ、屈辱に慣れてしまわなければ生きてはいけない社会になっていた。そんな社会と自分がとうてい相容れないことを先生はいち早く感じとり、涙ながら生まれ故郷を後にされたのであった。

もしあのまま台湾にとどまっていたら、先生のあの気性のことである、遅かれ早かれ何かをやらかしていたにちがいない。そして、よくて火焼島送り、悪くするとお兄さんのように殺されていたかもしれない。先生のような誠実と勇気と熱情の士が、当時の台湾で無事でおられるわけがない。

先生は香港から密航船に乗ってひそかに日本に上陸した。ここまではよくある話である。二・二八事件からその後四、五年にかけての血腥い「恐怖時代」の期間中、台湾をひそかに脱出して、合法または非合法に日本に入国したという経歴の持主は決して珍らしくはない。しかしこれらの人達の大部分は、自由と安全を日本の地に獲得したことでもって足れりとし、もって問題は解決したとしたのであった。台湾人全体の存亡にかかわる問題に対して、彼らは個人的な解決の中に逃げこんで、そこに安住してしまったのであった。

王先生にはそんなことはできなかった。そんなに器用に世の中をわたるには正直すぎたのである。先生の正直さというものは、単に嘘をつかないとか、人を欺さないとかいった生易しいものではない。それは苛刻な人生を先生に要求するものであった。全生涯を自己の信条と良心に則して恥じることなく生きることを要求するものであった。先生にとって蔣政権を拒否するということは、ただ口先でブツブツ不平不満をもらすことでもなければ、いたずらに大言壮語することでもなかった。それは全生涯かけてこれと戦うということであった。反体制であるとはそういうことなのである。

これは言うは易しいが簡単にできることではない。カッコウのよいことでもない。悪罵・中傷・政治的圧力にだまって堪えながら、骨身をけずる苦労を毎日つづけることである。報われぬ努力をコツコツと積みかさねることである。それも一年や二年ではない。先生は戦後の四十年間これを貫き通したのであった。それはもう求道僧

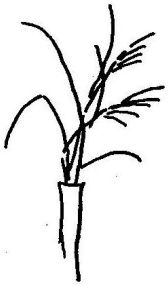
のような生涯だったといえよう。

その意味で、先生はまことに稀有の台湾人であった。日本では、台湾人はもっぱら金もうけにさとく、ゴルフがうまい人種として知られている。パチンコでかせぎ、キャバレーでもうけ、二重アゴのでっぷり脂ぎった顔になり、オンナの二人や三人も作り、北京に参詣して「共産主義万歳」を叫び、日本にもどってきては「周恩来総理が握手してくれた」ことを自慢話にして歩く。こんな台湾人ならいたるところにいる。掃いて捨てるほどいる。在日台湾人がもしこのような人達ばかりだったとしたら、私は絶望の奈落につきおとされて永遠に這いあがれなかったかもしれない。

昭和三十六年四月に日本に留学してきたとき、私はそれまで出合ったことのない新しいタイプの台湾人を王先生の中に見た。そして七月にはもう「台湾青年社」に加盟して、先生のあとにつづいて同じ苦難の道を歩むことを決意したのであった。

焼香のとき、私は祭壇に飾られた王先生の遺影をあらためて熟視した。美しい顔であった。厳しい倫理感に貫かれた人生だけが作り上げることのできる美しい顔であった。

美しい人生であった。立派な人生であった。合掌。



台湾語こそ民族の魂

林　啓　旭

台湾独立運動の巨星であり、また台湾語の権威者でもある王育徳博士が、九月九日、突然、心筋梗塞で亡くなられた。誠に残念無念である。

今年の五月、一度心臓発作をおこし、主治医から心臓病であることを知らされた。

それからの先生は、自ら「余命いくばくもない。倒れるまですべてを台湾人のために尽す」と言い、以前にもまして、独立運動、台湾人元日本兵士の補償請求運動、世界台湾同郷会の開催など、力の限りを尽し、全力投球されたのである。

生涯を台湾民族運動に捧げ、台湾を自由にして平等な独立国になすべく尽された先生は、まさに台湾民族の勇敢なる戦士であり、英雄でもある。すべての台湾人は、先生なき後に、一層、先生の功績と偉大さに驚嘆し、感謝するであろう。

台湾語研究の第一人者である先生が、台湾独立運動をおこし、それに命を賭けられたのは、極めて自然な成り行きであったと言えよう。

日本植民地統治の五十一年と戦後四十年に及ぶ中国国民党外来政

権の支配を合わせると、なんと一世紀近くにもなる。台湾人にとって、この一世紀は、長くて熱いものである。この百年間、台湾人の文化遺産の根源である台湾語は、常に植民地人語として、支配者から軽蔑され、いわれなき弾圧を受けてきた。そのために、台湾語の研究整理が遅れ、いまだに統一した表記法も確立されるに至っていないのである。これがまた台湾語の発音の乱れを増幅させる一因となっている。

「言葉は民族の魂である。台湾語をもっと大切にしろ！」、日常会話や会議での発言に間違った台湾語を使うと、きまって先生にきびしく叱られた。そのきびしい叱り声がいまだに耳許に残っている感じである。

ここ数年来、先生は統一した台湾語表記法の必要性を、とくに強調しておられた。今年の八月、静岡県御殿場で開かれた世界台湾同郷会の政治討論会においても、先生は台湾から大会に参加した教会関係者に、ローマ字台湾語聖書の現状について、質問されたのである。

ちなみに、中国国民党外来政権は、中国語の普及を妨げるとの口実で、ローマ字台湾語聖書の没収と使用禁止などの政策を、無理矢理に推し進めている。台湾の人口の中で、もっとも多くの人に使われている台湾語を、権力でもって強行に禁止することからみても、いまの国民党政権は、日本植民地政権となんらかわるところがない。彼らは自分達の言葉を台湾人に強制し、台湾人から台湾の文化遺産の根源である台湾語を奪い、台湾人同士のアイデンティティーの寄りどころである言葉の糸を断ち切ろうとしてきた。

「確かに、教会で用いられているローマ字台湾語表記法にも色々な欠点があり、改良すべきところもあろうが、少なくとも、この表記法は百年以上の歴史をもっている。また現にこの表記法で台湾語聖書が書かれ、多くの台湾人および台湾語を全く知らない外国人キリスト教牧師や信者が、この聖書を利用してきた。この教会ローマ字表記法こそ、独立した曉、台湾語の表記法として採用すべきである。台湾人は漢字の蟻地獄から一日も早く抜け出さなければならない。いまこそ統一した表記法を確立する時期である」、これが先生の持論であり、信念であった。

ここで私は高校時代、教会ローマ字にまつわる自分の経験を紹介して、先生の持論の正しさを裏付けたいと思う。

私が通った高校は、百年以上もの歴史をもつキリスト長老教会系の高校である。ことのおこりは確か高校一年のときだと記憶しているが、私の隣の席にいた詹君という友人が、よく昼休みの時間を利用して手紙を書いていた。普通の手紙なら、別に驚くこともないが、彼は常に英文字の組み合せで、いとも簡単に手紙を書いていた。当時、アルファベットを使う言葉といえば、英語しか知らない私にとって、実に不思議でたまらなかった。というのは、詹君は別に英語がとくにできるというわけではなかった。その彼が自由自在に英語で手紙を書けるはずがないと思った私は、彼に君はどの国の言葉で手紙を書いているの、と訊ねてみた。「台湾語だよ！」との彼の返事に私はびっくり仰天した。彼の説明によると、彼の年老いた

母親の知っている唯一の言葉とその文字といえば、このローマ字台湾語でしかない。彼女は教会ローマ字聖書からこの表記法を覚え、それを実生活に用いていたのである。この表記法さえ覚えれば、いかなる台湾語も表記できるようになる、いわば日本語の五十音と同じようなものである。

このような便利なものがあるのに、利用しない手はない。先生がとくにこの教会ローマ字表記法を強く推賞された理由がわかるような気がする。いずれにしても、台湾人は一日も早く先生の言われたとおりに、統一した台湾語表記法を確立し、実生活に応用して、台湾の文化を後世に残すべきである。

「人間だれしも一度は死ななければならないが、台湾人として生れてきた以上、台湾人のために何か残さなければならない」との先生の信念は、きっと多くの台湾人の共感を呼ぶに違いない。

永眠につかれた安らかな先生のお顔は、台湾人として生れ、台湾人としての尊厳を貫きとおした誇りに満足しておられるようにみうけられた。生きてその目で台湾独立を確めることができなかったのは残念ではあるが、先生の崇高なる理想は、必ず台湾人によって引き継がれる。どうぞ安らかにお眠り下さい。

自分にも同志にもきびしかった王先生

侯　栄　邦

私は王先生の発病からご臨終まで見届け、葬儀にはお通夜・告別式・火葬場まで付き添ったものの、王先生の逝去はあまりにも突然な出来事であり、今だに夢のようで実感がわかない。

独立運動や台湾人社会に対する王先生の貢献、並びに学術方面の業績については、弔辞やほかの文章で紹介されているので、ここでは省略し、良き同志、良き先輩として永年つき合っていただいた王先生のいくつかの思い出を書き記るしておきたい。

王先生は私たちとは年代的に、また受けた教育の違いがあるせいか、特に年功序列、礼儀作法等「修身」を重要視された。王先生は自分にきびしいが、同志にもきびしかった。聯盟において、先生は「家長」のような存在であった。「私は恨まれてもいいから敢えて悪役を買って出る。運動にとってプラスと思ったら、誰に向ってもびしびし言うからそのつもりでいて下さい」と、王先生は口ぐせのようにいっておられた。私の記憶が間違っていないとすれば、ほとんどの聯盟幹部が王先生から説教を受けたことがある。

王先生はその真面目な人柄から非常に時間を厳守された。聯盟の定例会合に、時どき遅刻する同志がいた。そこで王先生は「罰金制度」を提案された。一分遅れるごとに百円の罰金をとり、そして集まった金は聯盟の資金部に納入するのである。それ以来、いかなる会合においても、ほとんど遅刻者が出ないようになった。

ある日、公けの仕事で、王先生と新橋駅の烏森口で、午後三時に会う約束をした。ところがそれを十五分間も遅れてしまった。さてどう弁解したらよいのかを考えながら王先生の遅刻を暗に願った。期待は見事にはずれ、待ち合せの場所で不気嫌な顔をした王先生がすでに待っておられた。さんざんに叱られ、いつの間にか、弁解することも忘れてしまった。

王先生のお蔭でそれ以降、私は人と約束する場合、待たせるよりも待つ方が楽ということを悟り、約束時間の十分前に目的地に到着することを心掛るようになった。

盟員同士の日常会話はつとめて台湾語を使っている。だが、正しい台湾語を話すのは容易でない。会話中間違った時、王先生はその場でただちに直してくれるので、語学に弱い私には大変助かった。しかし、四十代にも入れば、記憶力が自然に衰え、同じミスを何度も繰返すことはめずらしくない。それを誤解した王先生は、ある日不愉快な口調で大勢の盟員に向って「真理は永遠に変わらない。正しいことは永遠に正しい。もし皆さんが権威というものを認めないならば、今後一切皆きんのミスを直すつもりはない。念のために聞いておくが、今後とも直してもらいたい人は手を挙げて下さい」と語った。もちろん挙手しない人は一人もいなかった。ご承知のように王先生は東京大学において、台湾語の研究で文学博士を授与され、台湾語研究の業績では島内の台湾人学者を含めて第一人者である。

王先生には息子さんがなく、二人のお嬢さんがあったが、ご長女は三年半前になくなり、二番目のお嬢さんも結婚したので、夫人との二人暮しであった。その後、外孫ではあるが、一女一男のお孫さんが生まれ、王家に再度活気が戻った。孫の写真を撮っては、聯盟の事務所へ持ってこられ、満面春風でお孫さんの自慢話を披露する。聯盟幹部の定期会合の後は、雑談に入るのが常であるが、王先生は時どき笑顔を浮べながら「今日は孫が遊びにくるから、先に失礼するよ」と言い残して、さっさっと姿を消すのである。王先生にとって、二人のお孫さんがいかに可愛いかがうかがわれた。

王先生は性格的にまじめで正直、きちょうめんでよく働かれた。苦労性と言うか、とにかく常に何かをやっていなければ気がすまない。雑誌『台湾青年』の発送なんか手伝わなくていいのに、王先生は常に皆と一緒にやられた。

数年前のある日、発送が予定よりも早く終わったので、ある同志が、今日は皆いろいろとよく働いたので久し振りに麻雀でもやろうと提案したところ、「賛成」、「異議なし」の声が返ってきた。遊んでいる中に、だんだん熱があがって時間が過ぎるのを忘れ、気がついたときには、時計の針はすでに一二時を廻っていた。結局終わったのは午前一時だった。

王先生は帰宅があまりにも遅かったので奥様に叱られてしょんぼりし、とうとう誰それと一緒に麻雀をしたと「白状」してしまった。一緒に遊んだ一人として、私は王先生に「拷問も受けないのに白状するとは最低ですね」と冗談を飛ばしたら、王先生は照れ笑いをされた。

のちに奥様にお逢いしたとき、「栄邦さん、たまに麻雀をするのはいいけど、夜ふかしは健康に悪いですよ」と忠告されたので、「麻雀と言う言葉は聞いたことはあるが、はたして麻雀牌というのはどういう形で、どういう色をしているのか見たこともない」と、私がちゃかしたら、「うそおっしゃい」と奥様にまじめな顔で怒られてしまった。

王先生はここ一年、聯盟幹部の会合で、「私は大学教授と言う職業をもっているが、それは副業だ。私の主業は台湾独立運動だ。私は命懸けでやっている。運動のためならいつ死んでもいい」と頻繁にいわれた。今年五月、狭心症と診断されたにもかかわらず、王先生は一向仕事を減らさず、いや、むしろ一層精力的に動き回っておられた。

「台湾人元日本兵士の補償請求」の二審判決後、王先生は早速与論の動向を示す三大新聞等の報道、社説、投書を集め、判決文を加えて、「補償請求訴訟資料速報」の編集にとりかかった。これが王先生の最後の仕事となった。

王先生はあたかも自らの死を予見したかのように、やるべき仕事を大急ぎで完成しようとされたように思える。正に運動のために燃え尽くされたのである。

家を売ってまで自費出版

蔡　五　郎

九月九日午後六時四十二分、王育徳教授は心筋梗塞で急逝された。その報に接した私はまず我が耳を疑った。何かの間違いだろう。なぜならば、前日にあたる九月八日、日曜日の午後に私は先生のお宅を訪れ、二時から五時まで三時間にわたって親しく色々とお話ししたのだから。私が帰った二時間後の午後七時頃に教授は心臓発作を起こして東京女子医大病院にかつぎ込まれ、意識を回復して一時小康状態を保ったが、翌日午後また発作を起こして遂に不帰の客となった。最後に会った訪問客として、私は一入感慨無量である。

私と王教授との出合いは三年前にさかのぼる。それはある記念集会においてであった。先生の御高名及び独立運動のことは前々から知っていたので、お会いしてみて、まさに文質彬々、いかにも学者らしいタイプに尊敬の念が沸き、以後年に一、二回会う程度で、会うたびにますます親近感を覚え、百年の知己のようであった。

かねてから教授のお宅へ一度伺おうと思っていたやさき、九月六日に電話があり、九月八日の日曜日午後、是非とも家族連れで遊び

に来てくれとの連絡があった。

約束通り九月八日午後二時、家内と娘を伴って訪ねた。私たちは狭い階段を登って二階の書斎に案内された。六畳位の戦前そのままの質素な部屋は書籍でいっぱい、興味深いのは先生の机である。今時分、古い物は何でも捨てるのが美徳といわれているこの日本において、この机はまさに骨董品である。教授は三十年来一日のごとく、この机に向ってせっせと本を書き続けた。「台湾語常用語彙」「台湾——苦悶するその歴史」「台湾海峡」「台湾語入門」「台湾語講座」……。教授の台湾語研究は特に優れ、われわれの母国語台湾語を体系づけた。

先生は特務の監視、あるいは親戚の白眼視をものともせず、ひたすら信念に燃えて、われわれ台湾人を啓蒙する論文を書き続けた。教授の私利私欲を求めず、清貧に甘んずる学究的態度及び革命家としての風格に、私は深い感銘を受けた。

教授との雑談の最中に、私は隣国、中国の故周恩来首相のパリ留学時代の下宿がそのまま保存されて今ではパリ観光コースに入っていることを話した。「どうぞ改築しないで、このまま永久に保存して下さい、将来必ず歴史的記念物になる」といったら、教授はただ微笑するだけだった。

今でも机の上には書き続けられた原稿が残っている。この机が私たちに何かを語り続けているようだ。この書斎が、そしてこの家が、歴史的建築物として残るのを願っているのは、私だけではないであろう。

私たちの雑談は家内の紹介から始まった。家内の曽祖父の名前を聞いて先生は一瞬びっくりしたようすであった。すぐに古い書籍を二、三冊取り出して、「あなたの曽祖父のことがここに書いてある。台湾史に名を残している偉い人だ。人間の命は短いが、成し遂げた仕事は歴史に残る。あなたはその後裔であることに誇りを持つべきだ」と教授はいった。

教授は約三十年前に、『台湾語常用語彙』を刊行するため、持ち家を七十五万円で売って出版費に充てたが、その家は今なら約七千五百万円はするだろうと、淡々といった。台湾の文化を大事にする教授の学究的態度、凡人の金銭感覚とは違う。

運動資金の募金に伴う苦労話も披露された。ある台僑が死に、先代との間に毎月の定期寄付の約束があることをその令息に話したら、「死人に口無し」といわれて、半分に値切られたとのことである。この令息がある大学の記念事業に最近兄弟三人の名義で合計三千万円寄付したと私が話したところ、教授は首を振って嘆いた。教授はまた、ある人物のところへ五、六回も足を運んだが、そのつど寄付を断わられ、根比べとばかりに、もう一度いったが、結局ダメだったとのことだった。

私たちがおいとましようとしたとき、教授は急に気弱な調子で、実は過去に五、六回狭心症の発作に見舞われたことを話した。私は「くれぐれもお体に気をつけて下さい。あなたは台湾にとって、なくてはならない重要な人だから」というと、教授は力強くきっぱりといった。「たとえ私が倒れても大勢の同志がいる。結束も固いので

心強い。全く安心できる」と。

私たちが王教授宅を辞去した二時間半後に、王教授は心臓発作で倒れ、そしてその二十四時間後に逝去したのである。

私は悲報に接すると直ちに知人に洩れなく電話した。あまりにも突然のできごとに、みんな声も出ない有様である。そのうちの一人は不在で、夫人が電話に出た。彼女は私の話を聞くや、涙声で「王教授は台湾にとってなくてはならない人物です。その死は台湾の一大損失です。私たち台湾人は王教授の死を無駄にしてはいけません。一層自覚し、結束すべきです。私は今まで勇気がなくて王教授にお会いしたことはございませんが、もう特務なんかこわくない。明日のお通夜には必ずいきます」ときっぱりいった。

謹んで王教授のご冥福を祈ります。

偉大な民族の魂の建設者

林　登　志

言葉は民族の魂です。国民党は台湾人の魂を奪おうとして、台湾で一切の台湾語教育を禁じています。王先生は台湾人の民族意識を確立するために台湾語の研究に打ち込まれ、台湾人が正しい台湾語を使えるよう偉大な貢献をされました。そればかりか、日本の学会における先生の御活動によって、日本の大学に台湾語の講座が設けられるに至ったのです。

研究熱心な学者だった王先生が、学究としての枠を踏みこえて独立運動に挺身されるようになったのも、先生の御専門が民族の魂の研究だったことと無関係ではないでしょう。先生が中心となって結成された「台湾青年社」は、世界に組織をもつ台湾独立聯盟に発展し、国民党に立ち向かっています。台湾の独立を達成し、先生の御遺骨を台湾に迎える日も遠くないでしょう。そのときこそ、台湾のすべての学校で、先生の研究された台湾語が国語として教えられるのです。そして、すべての台湾人が独立運動の偉大な先駆者として先生のお名前を胸にきざみこむことになるでしょう。

不可欠だった先生の研究

青木　達　雄

私が王育徳先生を知ったのは、「台湾の政治犯を救う会」においてである。

戦後の台湾が、日本の植民地支配から蔣介石の国民党独裁の支配に変わり、再び台湾人の苦難が続いたとき、先生は学究にとどまっておれなかった。

それまで、先生は文学、演劇、言語学等の真摯な研究に大きな成果をあげてきたが、先生の心の奥底に潜む台湾同胞への熱烈な愛情

は、やがて先生を強く政治活動に志向させることになった。それは台湾人による台湾の統治であり、台湾人の自主独立の精神の向上である。それまでの先生の研究はそのままこの目的に役立った。

台湾で育った台湾独自の芸能、文学の普及と、台湾語の維持、発展は、台湾人のアイデンティティーの確立のためには欠くことのできない条件である。先生の崇高な研究はこの政治活動の理念に結びつくものである。

台湾の独立を見ずに亡くなった先生は、さぞ残念だったことであろう。だが、先生の意を汲んで後に続く者が今は多数輩出している。これらの人々の今後の活動は、先生の期待に十分答えるものと信じる。先生、どうぞ安らかな眠りについて下さい。

王先生は、本当に愛情の深い、やさしい方だった

宋　重　陽

私がはじめて王先生にお会いしたのは、一九六一年七月のことだったと思う。同年八月発行の『台湾青年』第九号を編集するためだったからである。それまで編集していた人が急にやめてしまい、困っているので手伝ってほしい、と許世楷（現委員長）に頼まれて、一緒に王先生のお宅にうかがった。原稿の束を前において、よろしくお願いします、と王先生はあの頃もう晩年と同じように禿げあがっていた頭を深ぶかと下げられた。あまりにも鄭重だったので、私の方がアワを食ったのを覚えている。

この出会いが私の人生を決定した。いまだに私は本誌を編集している。この第三百号が王先生の追悼号になろうとは！

宋重陽というのはペンネームで、私が日本人であることを知って独立運動をやっていることをふしぎがる人がいる。「お母さんが台湾の方だったのですか」と聞かれたことも一再ではない。もともと私と台湾の間には、つながりといえるようなものはなにもなかった。一九五九年に留学生として日本へきたばかりの許世楷と会ったのが、台湾人と知りあった最初である。

「日本はアメリカに占領されて幸運だった。台湾は中国軍に占領されてひどい目に会っている」と、そのとき彼はいった。台湾のことをなにも知らなかった私は、おどろいてワケをたずねた。台湾人が解放軍と思いこんで迎えた中国軍の蛮行、圧制と略奪にたまりかねて台湾人が蜂起した二・二八事件など、このときはじめて私は知った。「そんな政府はぶっつぶしてしまえばいいじゃないか」というようなことを、私は許世楷にいった。

その翌年、安保闘争が盛り上がりつつあった頃、たしか駒場の留学生会館の許世楷の部屋だったと思う。「こんな雑誌が出たんだ」と、彼が目を輝かせながら私に見せてくれたのが『台湾青年』の創刊号だった。留学生を中心とする独立運動の組織が誕生したのであ

る。なかばお祭り騒ぎの安保闘争などとは本質的にちがう、民族の運命をかけた戦いだな、と私は思った。そんなことがあったから、許世楷も私に頼み、私も喜んで『台湾青年』の編集を引き受けたのである。

まもなく私は台湾青年社のメンバーたちの多くと友人になり、先生のお宅で開かれる編集会議にも出席するようになった。会議が日本語で行われていたので、私も参加することができたのである。王先生をのぞくと、みんな日本へきて何年もたっていなかった。蔣政権は台湾で大学を卒業して兵役を終えた者でなければ留学を認めていなかったので、みんな大学院生である。「日本語ができなくて日本で勉強できるか。みんなこれから日本語で修士論文や博士論文を書かなくてはならないのだ。うちで開く会議は日本語でやる」と王先生はいわれ、会議が日本語学習の場にもなっていたのだ。

私が正式に台湾青年社のメンバーになったのは、一九六三年のはじめだった。はじめは日本人の私を入れることに反対もあったらしいが、王先生の推挙があり、けっきょくみんなが私の加入に賛成してくれたという。一九六三年二月発行の『台湾青年』第二七号から六回にわたって連載した「常識論」が、『台湾青年』に書いた私の最初の論文である。王先生が絶賛してくださり、私は大いに自信をもった。やる気にさせるのがうまいのである。私が中央委員に選出されたのもこの頃だったと思う。

王先生を知る者なら、誰でも先生のきちょうめんさを知っている。原稿を締め切り予定日に一度も遅らせたことがないのは、王先生ただ一人だった。同志に対しては気づいたことをずけずけいわれるので、とくに新しいメンバーには王先生をけむたがる向きもあった。しかし、王先生は大変思いやりのあるやさしい方だった。

もう十二、三年前のことになろうか、王先生は小学時代の恩師の病気見舞いにわざわざ鹿児島まで行かれたことがある。そのとき、故呉枝鐘先生が「宋氏、われわれも一緒に行こう。鹿児島湾で釣りでもしようじゃないか」と言い出された。鹿児島は私の故郷である。王先生と呉先生、それに私の妹もいれて四人で鹿児島に行くことになった。われわれは羽田で落ちあったが、あいにくと台風が上陸したということで、九州行きの飛行機は欠航である。しかし、お二人とも「出なおそう」とはおっしゃらない。引き返すのが嫌いなのである。大阪まで飛んで様子を見ることになった。大阪の空港近くのホテルで一泊し、夜のうちに台風も過ぎ去ったので、翌朝の一番機で鹿児島へ向かった。父が車で空港へ迎えにきており、釣り舟も予約してあるという。父の家で一服したあと、さっそく父も一緒に海釣りに出かけた。しかし、台風が過ぎたばかりのせいか、ただの一匹も釣れなかった。船頭は大いに恐縮していたが、王先生も呉先生もそんなことは気にされない。

「煙を噴きあげる雄大な桜島を見ただけでもけっこうじゃないか」

「桜島を見ていると西郷隆盛や大久保利通が出たのもわかるような気がする」

などと、お二人はニコニコしておられた。御一緒に霧島の温泉に

行ったのも、いまでは懐かしい思い出である。

王先生が鹿児島まで恩師を見舞いにこられたことは、美談として地元の新聞にまで紹介された。とにかく、やさしいのである。八年前に父が亡くなり、つづいて同じ年に呉先生が亡くなった。その後、母が東京へ出てくるたびに、母をなぐさめようとして、王先生は実に親切にしてくださった。お茶をつめたジャーをぶら下げて、母を東京見物に連れて行ってくださったこともある。本郷の東大では、ある教室を指しながら「お母さん、私はあそこで十年も勉強したのですよ」と、王先生が話されたのを昨日のことのように思い出す。母を歌舞伎に招待してくださったのも三度か四度。母に王先生の訃報を電話で伝えたら「あの王先生が！」と絶句して、あとは声にならなかった。

王先生が台湾のためにどれほど尽されたかは、私があらためて書くまでもなかろう。台湾のためとあらば、王先生はいかなる犠牲もかえり見られなかった。命までも！ それほど、王先生の台湾に対する愛情は深かったのである。王先生は、本当に愛情の深い、やさしい方だった。

王育徳『台湾海峡』

日中出版刊　二、〇〇〇円

『台湾公論報摘要』

日本地区自一九八四年十月分起又增加一分漢文版刊物了。本刊的特色如下：

一、報導島内外台湾人的各種活動，登載台湾人的各種資料

二、内容豊富，每号B4型紙十頁，約四萬字。

三、每号售価二百円，寄二七〇円来即可収到下期号（七〇円為郵費）。

四、本刊每号，附寄回郵信封，請読者放入二七〇円郵票充当付款，敬希協力。

五、本刊原則上為月刊。每月発行一千分，所以只有定期訂戸才能定期収到本刊。訂費一年二千四百円（包含郵費），可用郵票或現款訂閲。

台湾公論報摘要社

〒一六二東京新宿区富久町八—二四　萬年ビル

電話：東京（〇三）三五九—七五六五

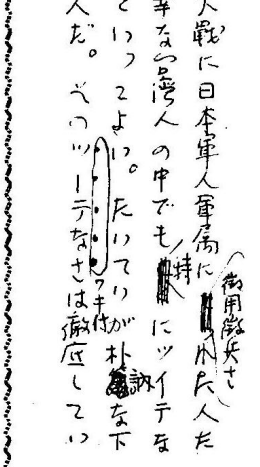
王育徳『台湾　苦悶するその歴史』

弘文堂刊　一、二〇〇円

「一寸の虫にも五分の魂」の戦い

二審は負けて勝つ　台湾人元日本兵の補償問題

王　育　徳



絶筆となった原稿

今年はとりわけ暑く忙しい夏だった。聯盟の会議と世界台湾同郷会の年次大会があいついで日本で開かれた。世界中から集まってきた人びとが散って行ったのは八月半ば過ぎだったが、王先生は息をつく間もなかった。台湾人元日本兵補償請求の高裁判決が八月二六日に迫り、「考える会」の事務局長の王先生はその準備に忙殺されたからである。救済を急げという二審判決は世論の大反響を巻き起こしたが、王先生はさっそく「補償請求訴訟資料速報」を編集、さらに本誌のためにこの原稿を書いている途中で倒れた。胸に狭心症という爆弾を抱えての猛烈な仕事ぶりは、まさしく壮烈な戦死という他はない。中途になった原稿をそのまま掲載する。

（編集部）

第二次大戦に日本軍人軍属に徴用徴兵された人たちは、不幸な台湾人の中でも特にツイテない人たちといってよい。たいていが朴訥な下層階級の人だ。そのツイテなさは徹底している。わけもわからずに軍人軍属にとられた上、戦地での待遇もよくない。ひどい部隊になると、日本人と歴然たる差別があった。降伏のあとは、日本人と切り離されて収容され、連合国側の中国人として優遇されるかと思いきや、「二等日本人」として軽蔑され虐待された。中国戦線が特に惨めだった。台湾に生還したあとは、祖国に弓を引いたものとして政府からにらまれ、目立たないように目立ないように生きてきた。そして補償要求運動をおこすと、日本政府の木で鼻をくくったような応待だ。

それでも「台湾人元日本兵士の補償問題を考える会」と知りあった故鄧盛さんはじめ十三人は幸運な方だったといえよう。「おれたちの組織に入れば人より早く補償を取ってやる」という宣伝文句の「討債団」にひっかかって、登録料を詐取された気の毒な人が、何万何千といる。登録料は「討債団」幹部のふところを肥し一部分は役人や立法委員への上納金となり、一部分はグルになった日本人政治ゴロの遊興費に消えた。

戦争が敗色歴然となった昭和十九年には、日本の「学徒出陣」に準ずる形で、台湾人の大学高専在学生も志願兵になることを強制され、昭和二十年に入ると、内地並みに台湾にも徴兵制がしかれた。

私はどうしたわけか、エアポケットみたいなところに入って、志願も強制されず、徴兵にもひっかからなかった。大学の一年先輩は確か志願させられたし、一歳年下の中央大専門部の弟は台湾で徴兵された。軍隊の経験がないことで、「台湾郷友会」のメンバーから「王に補償要求運動をやる資格はない」と非難されたものだ。

支那事変から太平洋戦争初期にかけては、日本政府は台湾人の忠誠心を信ずることができなかったので、台湾人を丸腰の兵站輜重要員にしか使わなかった。軍属といえば聞こえはいいが、実態は荷物担ぎの軍夫、農場開墾の生産隊員であった。総督府から新竹州は何人、高雄州は何人と割当てが来て、街・庄の現場では役人と巡査が立ちあいの下に「ここにハンコをつけ」「なければ母印でもよい」と一人一人いいつける。誰も反対できない。すると、何日後はどこそこに集まれと通知書が来て、家族も知らないところで短期間の訓練のあと、そのまま高雄か基隆につれていかれて船に積みこまれる、というのが既定の運命であった。

もし彼の父親がある程度役場や警察に顔がきけば、白羽の矢はかすめてとおった可能性が大きい。員数さえそろえればよいのだから、張某のかわりに李某でもかまわないわけだ。ツイテないことの始まり、といってよかろう。

厚生省が昭和四十八年四月十四日に発表した統計によると、台湾人の軍属は一二六、七五〇人、軍人は八〇、四三三人、合計二〇七、一八三人で、うち戦死者は軍人が二、一四六人、軍属は二八、一五八人、合計三〇、三〇四人である。一七六、八七九人が復員したことになるが、この中には故鄧盛さん、今回二度目の来日した洪火灶さん、洪坤圳さん、蘇鈴木さんのような手足を失った戦傷者が大勢

いるわけで、そばでかれらのゴジャゴジャした傷あとを見ると、どんなに痛く、どんなに不自由したかと胸がキリで刺される思いである。

補償要求運動にたずさわってつくづく感じるのは、人間の運命の糸の不思議な絡みあいである。お忘れのかたも多いと思うのでくりかえすが、「考える会」は昭和五十年二月二十八日に神田・学士会館で発会式をあげた。それは昭和四十九年十二月二十六日に、インドネシアのモロタイ島で中村輝夫一等兵（本名スニョン、勝手につけられた中国名李光輝）が発見されたときの日本政府のあまりに冷酷な差別に義憤をおぼえた台湾人と日本人によってつくられた。

私が「考える会」に関与するようになったきっかけは、昭和四十九年十二月三十一日に、朝日新聞にのった一篇の投書「中村さんを温かく迎えよう」である。これは二十八日に書いたのを郵便ではまどろっかしいと自分で新聞社にもっていったのが幸運にも採用されたもので、私はグアムの横井さん、フィリッピンの小野田さんのように、一旦日本につれてきて病院で病気のあるかないかを検査し、三十年間の精神的空白を埋めさせてから、台湾に帰すか日本にとどまらせるか、決めても遅くはないと訴えたのである。

どこでどう決まったのか、「在日台湾同郷会」で三十一日夕方、中村さんが台湾送還となったことに対する抗議の記者会見をやることになり、会長の郭栄桔氏が渡米不在のため、副会長の私が主宰した。大みそかにもかかわらず十社くらいが取材に来、テレビもあって盛況だった。朝日新聞が元日の社会面でデッカク取りあげてくれたのは予期せぬ成果であった。

これを読んでトソ気分が一遍に吹っとんだのが、現在「台湾人元日本兵等の問題懇談会」の会長をやっておられる自民党の有馬元治代議士であった。当時は浪人中で「王君がやってるんでは見殺しにできない」と私に電話をかけてきて、話に来るよういわれた。それで十人ほどの台湾協会、台湾関係戦友会の関係者を集めて「温く迎える会」をつくり、有馬さんが会長に選ばれた。私は独立運動者ということを白い目で見られた。

記念写真をとるときも入るなといわれた。正月三か日の休みがあけて「温く迎える会」は政府に陳情をすると同時に新宿や数寄屋橋で街頭宣伝活動をした。陳情文やビラやプラカードは連盟でつくった。街宣にくりだした人数も大部分が盟員である。

王育徳　著　『台湾語入門』

テープあり（二、〇〇〇円）

台湾青年社・㈱日中出版発行　定価　一、五〇〇円

王育徳　著　『台湾語初級』

テープあり（二、〇〇〇円）

㈱日中出版発行　定価　一、五〇〇円

〔東京高裁〕台湾人元日本兵の補償請求

国は救済を急げ

控訴棄却も、国にきついお注文

宋　重　陽

日本軍の軍人・軍属として第二次大戦に従軍し、死傷した台湾人とその遺族一三人を控訴人とする補償請求に対して、東京高等裁判所第一七民事部は八月二六日、判決を言い渡した。吉江清景裁判長は原告の要求を退けた一審判決を支持して控訴を棄却したが、日本に補償責任があるのは当然のこととして、救済を急ぐよう国に異例の注文をつけた。

道義的にも法的にも日本の責任

八二年二月の東京地裁判決は、原告に対して「同情は禁じえない」と一言つけ加えたが、補償を行うのは国の裁量次第で法的には問題はない、として政府の言い分をほとんど全面的に認めた。

この一審判決を不当として控訴した原告側の主張は、基本的には二段がまえになっていた。①台湾人も被害をこうむったときは日本国民だったのだから、日本人と同等に補償せよ。②もし適用すべき法律がないために要求を認められないというのであれば、必要な立法を行わないことが「法の下の平等」を定めた憲法に違反することを確認せよ。

大戦中、台湾人も同じ「天皇の赤子」として強制的に動員された。厚生省の調べによると、軍人が八〇、四三三人、軍属一二六、七五〇人、そのうち三〇、三〇四人が戦死し、さらに多数が負傷した。戦争裁判で有罪とされた者も一七三人にのぼり、そのうちの二六人は死刑判決であった。敗戦で日本が台湾の統治権を失ったあとも、台湾人は日本人と同じように戦犯に問われたのである。

大戦中は各国の軍隊にも、戦後独立した植民地人や外国人が参加していたが、戦勝国の米国、英国、フランスなどだけでなく、敗戦国のドイツ、イタリアなども、彼らに自国人と同じかそれに準ずる補償を行っている。

原告側弁護団は、「日本は台湾人の過去の犠牲に対して、日本人に

対する以上に優先的に補償すべきだった」と日本の道義的責任と問い「戦傷病者戦没者遺族等援護法と恩給法にもとずき、日本人と同じように補償する法的義務がある」と主張した。

日本人に対する補償は一九五二年に開始されたが、今年度分まで含めて一人あたりの支給額は、障害年金で二三、一五九、九一七円、遺族年金で一三、四四二、二七八円である。原告が訴訟で一人あたり五百万円を請求したのは、まことにひかえ目なものといわねばならない。

早急に原告らの不利益の払拭を

高裁判決は、原告らの戦死傷の事実が援護法と恩給法の対象となるべき性格であることを認めながらも、具体的な措置は国の法律と立法に委ねられているとして、両法が国籍条項と戸籍条項で非日本人を対象から除外していることは違憲でないと断定した。

また高裁判決は、諸外国の例でも外国籍の旧軍人等に対する補償の多くは被補償人の国籍国との条約や協議にもとずいて行われていることからしても、日本が日華条約でこの問題の解決を約束したことを妥当と認めた。

たしかに日本政府に補償の意図がなかったわけではない。一九五二年に日華条約が締結されたあと、日本側は何度かこの問題の協議を申し入れたが、国民党が乗ってこなかったのである。当時、厚生省へ相談に行った台湾人の傷痍軍人が国府大使館に行けといわれ、そうしたところ「お前たちは敵軍だったくせに！」といって追い出されたこともある。条約で約束された補償問題の解決が放置された一半の責任が国民党にあることは疑いない。しかし、一九七二年の日中国交正常化にあたって日本は一方的に日華条約の失効を宣言したのだから、その後の責任はすべて日本にあるといわねばならない。

高裁判決は、補償立法を行うのは国会の専権事項であるとして、原告側の違憲確認の訴えも退けた。しかし、同時に国側の反論（①日本人の残置財産を含めた日台間の請求問題の未解決。②台湾以外の同様な問題の残る地域への波及。③財政事情など）を理由にならぬとして退け、高裁判決は日本が「補償、救済の遅れについて道義上の責任を負うべきことは当然」であり、「控訴人らは同様の境遇にある日本人と比較して著しい不利益をうけていることは明らかであり、しかも戦死傷の日からすでに四〇年以上の歳月が経過しているのであるから、予測される外交上、財政上、法技術上の困難を超克して、早急にこの不利益を払拭し、国際信用を高めるよう尽力することが、国政関与者に対する期待であることを特に付言する」と述べている。

当然のことながら敗訴した原告は最高裁に上告したが、裁判所には裁判所の限界がある。判決を書いた吉江裁判長は奇しくも台北高校で故王育徳博士と同期の友人であった。この高裁判決が裁判所にできる限界だったのかも知れない。もはや問題は裁判所の手を離れ、国会と政府の出方にかかっているといえよう。

原告たち、日本の不信義に怒る

台湾人元日本兵の補償請求

国は救済を急げ

「違憲確認」退

道義的観点で

吉江 清裁判長

朝日新聞

控訴棄却の一方で

著しい

朝日新聞東京本社

毎日新聞 1985年(昭和60年) 8月27日(火曜日) (日刊)

「国に道義上の責任」

毎日新聞

台湾人元日本兵の

補償

朝日 社説 1985年(昭和60年) 8月2 7版 社説 毎

昭和60年(1985年)8月28日(水曜日)

読賣新聞

THE YOMIURI SHIMBUN

第39213号 (日刊)

台湾人の元日本兵士

国は救済策急げ

東京高裁 補償請求は棄却

道義が問われる元日本兵補償

毎日 社説

問われている日本の「道義」

読売 社説

台湾人元日本兵の救済を急げ

(二審判決を伝える新聞報道と社説)

八月二六日に東京高裁で判決が出たあと、裁判所に近い日弁連会館で「台湾人元日本兵士の補償問題を考える会」の主催により「二審判決市民集会」が開かれた。

「考える会」の宮崎繁樹代表世話人は「原告団の代表格だった鄧盛さんと全永福さんも昨年去くなった。日本の軍人・軍属だった台湾人は年老いて次つぎに世を去っており、もう限界である。早急に補償が立法化されるよう努力せねばならない」と挨拶した。

秋本英男弁護団長は「控訴は棄却されたが、苦渋に充ちた判決であり、実質的には原告側の主張が認められた」と、専門家の立場から二審判決を評価した。

判決公判に出席するために台湾からきた五人の原告は、弁護団や「考える会」などの支援に謝意を表すると同時に、日本の不信義を口ぐちに非難した。

海軍に召集されて左足を失った洪火灶さん(67)は「台湾人をバカにしすぎている。一視同仁、天皇の赤子、あとは一切の面倒を国が見る、といって召集しながら、日本はわれわれをだました。日本は世界でもっとも道義のない国になってしまった。靖国神社に祭られている三万の台湾人の英霊に対して、中曽根首相はどんな気持ちで参拝したのか」と憤りをあらわにした。

蘇鈴木さん(61)は「判決は残念だ。同情するというのは見殺しにするということか。大事なのは一日も早く補償が実行されることだ」と、敵弾で手を失った右腕をふりあげた。

亡くなった鄧盛さんの妻、蘭英さん(61)は「夫は十数年来この運動に生命をかけてきた。夫は補償の実現を信じていたのに、その日を見ずに死んだのはどんなに残念だったことか」と涙ながらに語った。

市民集会は最後に中曽根首相に対する次のような決議を採択した。

「今年はちょうど戦後四十年にあたる。日本はその間敗戦の廃墟のなかからたちなおり、いまや自由世界第二の経済大国に発展した。しかし物質面の復興を急ぐあまり、精神面で失ったものも少なくない。台湾人元日本兵士に対する補償問題をなおざりにしてきたこともその一つである。……中曽根内閣は〝戦後政治の総決算〟をうたっている。教育の改革では道義・日本精神の再興をうたい、靖国神社の公式参拝も行ない、戦死者に対して追悼の意を表した。しかし、いまもって台湾人元日本兵士の補償問題を解決しないのは首尾一貫せず、道義にも人道にも合致しない。……台湾人元日本兵に対して正当な補償をすることは、かれらのためだけではなく、日本人が信義と道義を守る民族であることのあかしでもある。われわれは、政府が一日も早く合理的な補償措置を講ずるよう要望する」

世論の強力な支援が必要

国会の全政党が支持を表明してきたにもかかわらず、補償立法はいまだに実現しない。票にも利益にもならない問題では、議員たちが熱心にならないことを如実に示すものである。国会と政府を行動にかりたてるためには、世論の強力なあと押しが必要であろう。

台湾青年　一九六一年11月22日　第三種郵便物許可　一九八五年10月5日（毎月1回5日発行）月刊第三〇〇号

幸い、今回マスコミはこぞって強い関心を示した。ラジオ、テレビはいずれも判決内容をただちに伝え、翌日の新聞はほとんどが一面で大々的にとりあげ、社会面などを使って解説も行った。いずれも「救済を急げ」という判決の付言に焦点をあてる好意的な報道であった。翌日の社説ではほとんどの新聞がこの問題をとりあげ、日本の道義が問われているとして補償を急ぐよう訴えた。よく読まれているコラム『朝日』の「天声人語」、『読売』の「編集手帳」、『サンケイ』の「サンケイ抄」なども国政関係者の怠慢を非難し、それに多くの投書が続いた。『ジャパン・タイムズ』も「重大な日本の道義的責任」と題する社説を掲げたから、在日外国人の多くも日本のこの不道義を知り、あきれたことであろう。世論を盛りあげ、補償の早期実現をはかるために、世論の継続的な支援が望まれる。

公告

中央委員会の推せんにもとずき、
孫明海を『台湾青年』発行人に、
宋重陽を同編集長に任命する。

一九八五年九月二〇日

台湾独立聯盟日本本部委員長　許世楷

台湾青年

月刊**台湾青年**　300号1985年10月5日
頒価 US$2.50　¥300　FF23

発行人　孫明海
編集長　宋重陽
発行所　台湾独立聯盟
WORLD UNITED FORMOSANS FOR INDEPENDENCE
〒162　東京都新宿区富久町8-24番地
万年ビル　電話：東京（03）351-2757

郵便振替　東京　8-44168

「台独之声」播送電話：
第1号　東京（03）351—6510
第2号　東京（03）359—9471

台湾独立聯盟総本部（W. U. F. I.）
P. O. Box 503, Kearny, N. J. 07032
U. S. A.電話：米国（212）684—3972
米国本部（W. U. F. I., U. S. A.）
P. O. Box 26163, Santa Ana, Ca. 92799
U. S. A. 電話：米国（714）531—0373
日本本部
Mannen Bldg., 8-24 Tomihisacho, Shinjuku-ku, Tokyo 162, Japan
カナダ本部
P. O. Box 245, Station A, Willowdale, Ontario, Canada M2N 2P1
欧州本部
AU BING
Postfach 149,
1091 Wien, Austria
台湾本部　台湾 台北市
南米本部　Saõ Paulo, Brasil